

兵庫県龍野市所在

大陣原古窯跡群

—山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査報告書XIV—

1995年3月

兵庫県教育委員会

兵庫県龍野市所在

おお じん ばら
大陣原古窯跡群

—山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査報告書XIV—

1995年3月

兵庫県教育委員会

例　　言

- 1 本報告書は、兵庫県教育委員会が昭和55年度に実施した大陣原窯跡群の発掘調査報告書であり、兵庫県文化財調査報告書第140号にあたる。
- 2 大陣原（おおじんばら）窯跡群は、兵庫県龍野市揖西（いっさい）町土師（はぜ）字大陣原に所在する。
- 3 遺跡の地形図、および遺構の実測図の方位は、磁北を示し、水準は東京湾平均海水準（T.P.）を使用した。
- 4 遺物のうち、土器類については、通番号をふり、実測図と写真の番号が対応するようにした。
- 5 調査にかかる遺構実測・写真撮影は、調査員が実施した。
- 6 本文の執筆は、調査員が行い、一部池田征弘が行った。
- 7 本書の編集は、調査員が行った。
- 8 本報告書にかかる出土品ならびに記録写真、関係書類は、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所および兵庫県魚住分館において保管している。

本文目次

第1章 調査の経緯	
第1節 調査にいたる経緯	1
第2章 遺跡の位置と環境	
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	2
第3章 遺構	
第1節 1号窯跡	6
第2節 2号窯跡	8
第3節 3号窯跡	14
第4節 4号窯跡	17
第5節 5号遺構	20
第4章 遺物	
第1節 遺物の概要	22
第2節 須恵器・土師器	22
第3節 瓦	37
第4節 陶棺	50
第5節 炉壁片・鉄滓	52

挿 図 目 次

第1図 大陣原古窯跡群と周辺の遺跡	3	第23図 3号窯跡 窯体出土土器2	29
第2図 分布調査時採集の須恵器	4	第24図 3号窯跡 窯体出土土器3	30
第3図 遺構全体図	7	第25図 3号窯跡 灰原出土土器1	32
第4図 1号窯跡と2号窯跡	8	第26図 3号窯跡 灰原出土土器2	33
第5図 1号窯跡窯体図	9・10	第27図 3号窯跡 灰原出土土器3	34
第6図 1-A窯跡	11	第28図 3号窯跡 灰原出土土器4	35
第7図 1-B窯跡	11	第29図 3号窯跡 灰原出土土器5	36
第8図 竪穴状遺構	12	第30図 3-A窯跡 出出土器	37
第9図 2号窯跡窯体図	13	第31図 1号窯跡 出土瓦	38
第10図 3号窯跡	14	第32図 3号窯跡 出土瓦1	40
第11図 3号窯跡窯体図	15・16	第33図 3号窯跡 出土瓦2	41
第12図 4号窯跡	17	第34図 3号窯跡 出土瓦3	42
第13図 4号窯跡窯体図	18	第35図 3号窯跡 出土瓦4	43
第14図 4号窯跡断面図	19	第36図 3号窯跡 出土瓦5	44
第15図 5号遺構	21	第37図 3号窯跡 出土瓦6	45
第16図 5号遺構平面図	21	第38図 3号窯跡 出土瓦7	47
第17図 1号窯跡 窯体出土土器	23	第39図 文字瓦	48
第18図 1号窯跡 灰原出土土器1	24	第40図 文字瓦の文字部分	48
第19図 1号窯跡 灰原出土土器2	25	第41図 陶棺1	50
第20図 2号窯跡 窯体出土土器	26	第42図 陶棺2	51
第21図 2号窯跡 灰原出土土器	27	第43図 炉壁片	52
第22図 3号窯跡 窯体出土土器1	28		

表 目 次

第1表 3号窯跡出土平瓦観察表	49	第2表 3号窯跡出土丸瓦観察表	49
-----------------	----	-----------------	----

図版目次

- | | |
|--|-----------------|
| 図版1 1号窯跡（上）1号窯跡（表土除去後）
（下）1号窯跡全景 | 図版18 1号窯跡 出土瓦 |
| 図版2 1号窯跡（上）1-A窯跡
（下）竪穴状造構石組み | 図版19 3号窯跡 出土瓦1 |
| 図版3 2号窯跡（上）2号窯跡全景
（下）1号・2号窯跡全景 | 図版20 3号窯跡 出土瓦2 |
| 図版4 3号窯跡（上）3号窯跡全景（調査前）
（下）3号窯跡全景（調査後） | 図版21 3号窯跡 出土瓦3 |
| 図版5 3号窯跡（上）3号窯跡全景
（下）3-A窯跡全景 | 図版22 3号窯跡 出土瓦4 |
| 図版6 4号窯跡（上）4号窯跡全景
（下）4号窯跡全景（西から） | 図版23 3号窯跡 出土瓦5 |
| 図版7 4号窯跡（上）横口（煙道部側）
（下）焚き口 | 図版24 3号窯跡 出土瓦6 |
| 図版8 4号窯跡（上）煙道部（窯体外から）
（下）煙道部（窯体内から） | 図版25 3号窯跡 出土瓦7 |
| 図版9 5号遺構（上）5号遺構全景（北から）
（下）5号遺構全景（西から） | 図版26 3号窯跡 出土瓦8 |
| 図版10 1号窯跡 出土土器 | 図版27 3号窯跡 出土瓦9 |
| 図版11 2号窯跡 出土土器 | 図版28 3号窯跡 出土瓦10 |
| 図版12 3号窯跡 窯体出土土器1 | 図版29 3号窯跡 出土瓦11 |
| 図版13 3号窯跡 窯体出土土器2 | 図版30 3号窯跡 出土瓦12 |
| 図版14 3号窯跡 窯体出土土器3 | 図版31 3号窯跡 出土瓦13 |
| 図版15 3号窯跡 窯体出土土器4 | 図版32 3号窯跡 出土瓦14 |
| 図版16 3号窯跡 灰原出土土器1 | 図版33 3号窯跡 出土瓦15 |
| 図版17 3号窯跡 灰原出土土器2 | 図版34 文字瓦 |

第1章 調査の経緯

第1節 調査にいたる経緯

山陽自動車道は正式には「高速自動車国道 山陽自動車道 吹田山口線」といい、大阪府吹田市を起点に山口県山口市にいたる延長434kmの高速道路である。吹田市から神戸市北部までは中国自動車道と重複しており、神戸市北区の神戸ジャンクションにおいて、中国自動車道と分歧する。

兵庫県においては、神戸市北区から三木市・小野市・加古川市・姫路市・夢前町・龍野市・相生市・赤穂市の内陸部に近い平野や山地を貫き、岡山県の備前市にいたる。

兵庫県内を通過する山陽自動車道の建設工事は、第6次施工命令区間の工事区間として、県西部の赤穂市・相生市側から計画された。この工事計画に伴い、分布調査は昭和46年に山陽自動車道の基本計画が発表された後、地元研究者を中心に幅広い範囲で実施された。その後、龍野市域の詳細分布調査は昭和50年度に行われ、調査結果をもとに日本道路公団大阪建設局と兵庫県教育委員会の間で協議が重ねられてきた。また、兵庫県教育委員会としても、工事計画に基づき隨時路線内の分布調査を行い、調査結果ごとに協議を行った。

確認調査は、昭和53年度に相生市ツブレ池古墳・龍野市南山散布地・龍野市と揖保川町にまたがる片島1号墳の確認調査を皮切りに実施し、翌年に赤穂市草山遺跡・相生市縁ヶ丘窯跡群の全面調査が行われた。

昭和55年度からは龍野市を中心として調査が実施され、当初20箇所地点が調査対象地として挙げられていたが、その後の確認調査等で全面調査実施遺跡は15箇所となった。

大塚原窯跡群の調査は、15箇所の全面調査実施遺跡の1箇所であり、相生市縁ヶ丘古窯跡群を中心とした相生窯跡群の一部であり、昭和55年度に調査を実施した。

調査は昭和55年10月8日から昭和56年2月2日まで行い、当初の奈良から平安時代にかけての瓦陶兼業窯跡の調査と、その後判明した製鉄関連遺構を含めた炭窯の調査成果を得て終了した。

調査の組織

調査事務 社会教育・文化財課

課長	藤和重喜
参考事	田中幹雄
副課長	道畠實
課長補佐兼	
埋藏文化財係長	池田義雄
主査	大村敬通
技術職員	吉識雅仁

調査担当 社会教育・文化財課

技術職員 吉田昇・種定淳介

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

遺跡は、播磨灘に注ぐ揖保川の右岸に位置し、JR相生駅の北東約2kmにあたる。県道姫路上郡線と国道2号線に挟まれる当該地は、姫路平野の西端を望み、標高260mの光明山から派生する山塊が南東に延びる丘陵斜面である。標高は50m前後のほぼ南北に面した緩斜面で、その南部には農林水産省兵庫種畜牧場が開設されている。

この付近の西播磨山地は、山頂付近の起伏に乏しく、一般に隆起準平原と呼ばれている。県道姫路上郡線に沿う龍野一上郡断層によって山地は分断され、その北は山地面積が広いのに対して南は山地が低く小面積となり、西播磨丘陵群を形成している。また遺跡の南東は、大阪層部下部の大障原疊層と、その上位の揖保川河谷を中心に広く分布する揖保川疊層が形成した低丘陵と上位段丘が広がっている。しかし、段丘の発達の程度は瀬戸内海側の海岸線をみても加古川流域部のものとは比すべきもなく、揖保川に面する大部分の山裾は、それらの大量の土砂礫の下に埋もれている。揖保川の運ぶ土砂の多さを示す好例⁽¹⁾である。

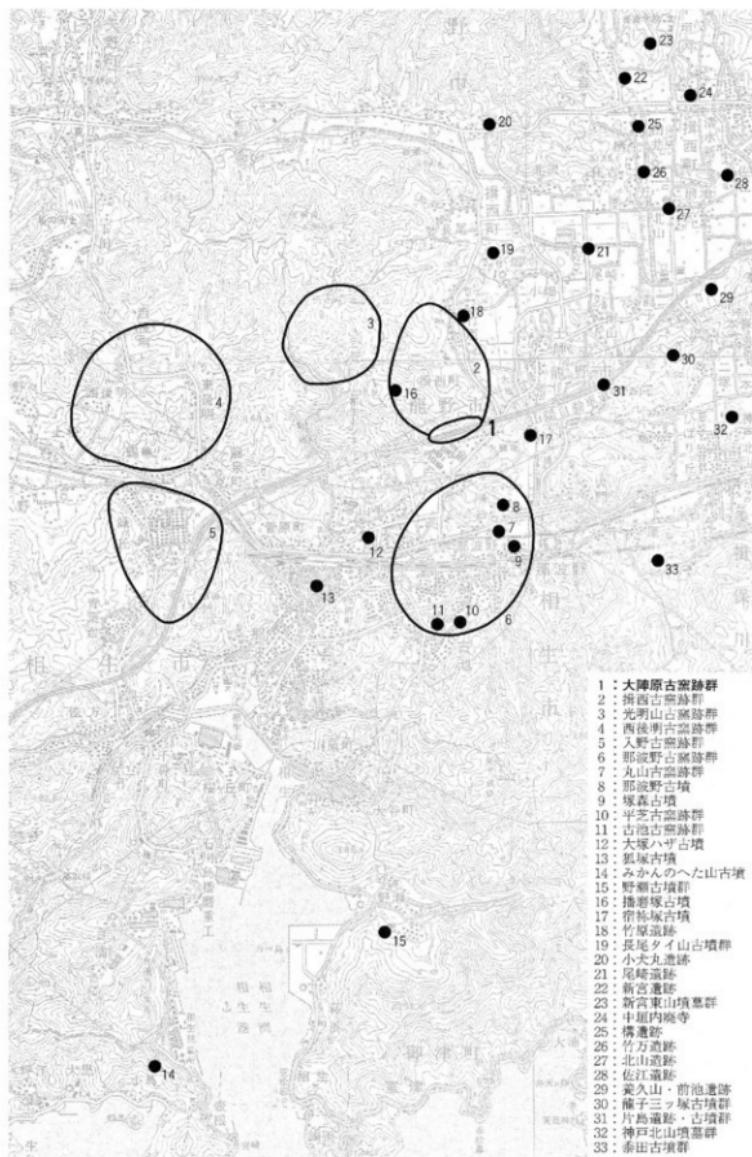
さらに南側は、新幹線を挟んで東から派生した揖龍低地がわずかに広がる。そして標高300mを越える天下台山を経て、播磨灘にいたる。また、遺跡の1km西の渓谷には鮎川が南流し、南は普光沢川が西流して相生湾に注いでいる。

第2節 歴史的環境

市域とその周囲に所在する旧石器時代の遺跡は、皿池遺跡などが挙げられるが、数は多くはない。⁽²⁾また、縄文時代については、後期から晩期の小犬丸遺跡、後期の清水遺跡などが知られているが、詳細は明らかではない。

弥生時代でも前期の遺跡は少なく、揖保川左岸では門前遺跡や太子町常企遺跡⁽³⁾が知られるが、右岸では揖保川町袋尻浅谷遺跡⁽⁴⁾が挙げられるにとどまる。中期以降は遺跡の数と規模は増加してゆく。尾崎遺跡⁽⁵⁾は、調査面積に比べて土器量が豊富であり、西播磨中期弥生土器の標準資料となっている。この他中期の集落では、小犬丸遺跡や竹方遺跡などが確認されている。また周辺の佐江遺跡では製塩土器が出土⁽⁶⁾しており、北山遺跡では青銅器生産に関連する遺物も発見され注目を集め。養久山・前地遺跡⁽⁷⁾では人骨や鹿、獐骨をもつ掘立柱建物などを描いた土器が発掘調査され、大和地方との関連も説かれている。後期以降になると、丘陵上に築かれた墳丘墓⁽⁸⁾が登場する。養久山墳墓群⁽⁹⁾などがその代表例である。弥生終末と比定される白鷺山墳墓群⁽¹⁰⁾は、石棺内に破碎した舶載內行花文鏡や小形彷製鏡、多くの鉄器が副葬されており、被葬者の地位を彷彿とさせる。

古墳時代にはいり、揖保川下流域は衆目を引く地域となる。周辺では、京都府椿井大塚古墳などと同範の三角縁神獣鏡をもつ新宮町吉島古墳⁽¹¹⁾が当地方最古の古墳のひとつとして早くより周知されていた。また、5面の三角縁神獣鏡や特殊埴輪を配した揖保川町椎現山51号墳⁽¹²⁾の調査も記憶に新しい。また、やや遅れて龍子三ツ塚古墳群⁽¹³⁾が形成され、新宮東山墳墓群⁽¹⁴⁾では、多様な地域間交流を示す痕跡が残されていた。さらに最古式の須恵器が出土した相生市宿禰坂古墳⁽¹⁵⁾や円筒埴輪を配する揖保川町片島古墳⁽¹⁶⁾などが



第1図 大陣原古窯跡群と周辺の遺跡



第2図 分布調査時採集の須恵器

後続する。6世紀中頃の西宮山古墳は、横穴式石室をもつ中・西播磨での最後の前方後円墳である。この石室は、玄室の平面が方形であり、四壁がせり出す穹窿式であること、また豊富な副葬品を所有することが特徴である。長尾タイ山古墳群は、5世紀末から6世紀後半にかけての群集墳であり、12基の古墳が調査された。そして、相生市那波野古墳群⁽²⁵⁾や同じく若狭野古墳など、7世紀代の古墳が出現してゆく。

さて、須恵器生産も古墳時代には開始されており、相生市那波野丸山窯跡群3号窯跡⁽²⁶⁾の須恵器はTK23~MT15に並行するとされている。この他、西播磨地方において古墳時代に須恵器を焼成した窯跡は、中井窯跡⁽²⁷⁾、御津町碇岩窯跡、姫路市青山窯跡群、赤穂市山田窯跡が挙げられる。とりわけ、相生市那波野丸山窯跡の製品は、掛保川町笠田古墳⁽²⁸⁾に供給されたことが胎土分析を通して判明している。

小神庵寺では、飛鳥時代後半に比定される素引八葉蓮華文軒丸瓦が出土しており、播磨最古の寺院跡と考えられる。また、平成6年の山陽自動車道にかかる分布調査によって、大暁原で新たに7世紀代の須恵器窯跡が発見された。窯跡とともに須恵器（第2図）が採集されたことにより、窯跡の存在が確認されたのである。この窯跡は、ここで報告する窯跡群と同一の丘陵に位置し、東に張り出した尾根の東北向き斜面にあたる。この発見により、大暁原窯跡の操業は7世紀に遡ることになり、派生する問題は少なくない。

奈良時代には、県道姫路上郡線に重複するように古代山陽道が築かれ、沿線には先の小神庵寺、中垣内魔寺などの寺院跡とともに、延喜式にみられる「布勢駁家」に比定される小犬丸遺跡などが点在している。また、小神庵寺や小犬丸遺跡では平安時代にかけても存続していたことを示す遺物が出土している。

大暁原窯跡群は、大きく相生窯跡群を形成する一支群であり、その中の掛西地区に属している。この相生窯跡群は、相生市を中心として一部龍野市に及んでおり、国道2号線を挟んだ南北の丘陵上に130基以上の窯跡が確認されている。これらは、西から相生市西後明、入野、光明山、那波野、龍野市掛西の五地区に区分され、前3地区は旧赤穂郡に、残る後3地区は旧掛保郡に帰属している。須恵器の生産は古墳時代に那波野丸山窯跡で開始され、統いて掛西地区の人陣原窯跡で操業が行われた。奈良時代には西後明地区と光明山地区でも窯が築かれ、平安時代前半はこれらの地区と入野地区に拡大されてゆく。平安時代後半は入野地区の縁ヶ丘窯跡群周辺に生産の中心が移り、那波野と掛西でも操業が再開される。ただし、旧掛保郡に相当する那波野と掛西は、この時期瓦陶兼業窯を構築しており、旧赤穂郡内の窯跡との生産形態の相違が指摘されている。

註

- (1) この節の記述については、次の文献を参照している。
田中真吾・後藤博弥「龍野とその周辺の地質と地形」「龍野市史」第1巻 1978年
- (2) この節の記述については、次の文献を参照している。
松本正信・今里幾次・池田次郎「龍野とその周辺の考古資料」「龍野市史」第1巻 1978年
松本正信・今里幾次・池田次郎「龍野とその周辺の考古資料」「龍野市史」第4巻 1984年
- (3) 兵庫県教育委員会「山陽新幹線建設地内兵庫県埋蔵文化財調査報告書」1971年
- (4) 兵庫県教育委員会「兵庫県太子町常全遺跡調査概要」「山陽新幹線建設地内兵庫県埋蔵文化財調査報告書」1971年
- (5) 拝保川町教育委員会「袋尻洩谷」1978年
- (6) 龍野市教育委員会「尾崎遺跡」1977年
龍野市教育委員会「尾崎遺跡Ⅱ」1995年
- (7) 松本正信・今里幾次・池田次郎「龍野とその周辺の考古資料」「龍野市史」第4巻 1984年
- (8) 龍野市教育委員会「北山遺跡」2001年
- (9) 龍野市教育委員会「幾久山・前地遺跡」1995年
- (10) 近藤義郎他「幾久山墳墓群」1985年
- (11) 松本正信・今里幾次・池田次郎「龍野とその周辺の考古資料」「龍野市史」第4巻 1984年
- (12) 梅原末治「揖保郡香島町吉古墳」「兵庫県史蹟名勝天然記念物調査報告」第2輯 1925年
近藤義郎他「古高古墳」1983年
- (13) 近藤義郎他「椎現山51号墳」1991年
- (14) 梅原末治「竪子三つ塚」「兵庫県史蹟名勝天然記念物調査報告」第9輯 1932年
- (15) 龍野市教育委員会「新宮東山古墳群」1996年
- (16) 松本正信・今里幾次・池田次郎「龍野とその周辺の考古資料」「龍野市史」第4巻 1984年
- (17) 兵庫県教育委員会「片島古墳群・片島遺跡」1995年
- (18) 八賀 訓「西宮山古墳出土遺物」「富雄丸山古墳 西宮山古墳出土遺物」1982年
- (19) 龍野市教育委員会「長尾・タイ山古墳群」1982年
- (20) 相生市市史編纂室「那波野古墳」1984年
- (21) 相生市市史編纂室「若狭野古墳」1982年
- (22) 森内秀造「相生の古代窯業」「相生市史」第1巻 1984年
- (23) 井内 錠「龜野市・中井瓦窯跡発掘調査報告」1969年
- (24) 兵庫県教育委員会「篠田古墳」1982年
- (25) 鎌谷木三次「播磨小神廟守」「兵庫県史蹟名勝天然記念物調査報告」第17輯 1942年
龍野市教育委員会「小神廟寺発掘調査報告」1992年
- (26) 兵庫県教育委員会「小犬丸遺跡Ⅰ」1987年
兵庫県教育委員会「小犬丸遺跡Ⅱ」1989年
龍野市教育委員会「布勢駅家一小犬丸遺跡1990・1991年度発掘調査調査概報一」1992年
能野市教育委員会「布勢駅家Ⅱ一小犬丸遺跡1992・1993年度発掘調査調査概報一」1994年
- (27) 森内秀造「兵庫県相生古窯址群について」「日本史論叢」第10輯 1983年
- (28) 森内秀造「平安時代の窯業生産－播磨地方の須恵器生産を中心に－」「歴史における政治と民衆」1986年
- (29) 兵庫県教育委員会「相生市・綠ヶ丘窯址群」1986年

第3章 遺構

第1節 1号窯跡

調査区中央やや西寄りに立地しており、深い谷を挟んだ南向きの斜面上に位置している。

1号窯跡は同一斜面上の下方に、2号窯跡が築かれている。

また、1号窯跡の周囲には小型の窯がみられ、焚口を挟んで西の窯を1-A窯跡、東の窯を1-B窯跡と呼称している。さらに、焚口下方（南下）には、斜面を削平して平坦面を作り出した、竪穴状の遺構が3箇所みられる。

その他、窯に伴う施設的なものとして、排水施設的性格の掘り込みが3箇所みられる。

1. 1号窯跡

窯は全長6.8mの半地下式の窑窟であり、残り状態は極めて良好である。

窯体の幅は焚口で1.3m、焼成部で1.1m、先端部で0.6mを測る。全長の割に幅の狭い、細長い感じの強いものである。側壁は焚口で0.2m、焼成部で0.7m、先端部で0.3m残存する。

窯体の天井部は、中央やや先端寄りに0.5mの幅で残存しており、床面からの高さは0.85mを測る。

床面の傾斜は約27°で、窯体主軸の方位はN-23°-Eである。断ち割り調査の結果、床面は一枚であるが、焼成部付近で一部補修の痕跡が認められる。

また、窯体先端部左右と窯体左側に、幅1.5~2.0m、長さ3.0mの方形状の掘り込みが3箇所みられ、排水に伴う施設と考えられる。

a. 竪穴状遺構

1号窯跡焚口前方（南側）より竪穴状遺構と言べき遺構が3基検出されている。

竪穴遺構1は不整形プランで、一辺13mの方形と一辺18mの遺構が連結してゐるかの様な形態を呈しているが、南側の斜面は流出しており、一部で段になつてゐるが床はほぼ水平である。

また、西側の北壁に接して、0.52×0.72mの平らな石を水平に据えた石組み遺構と、直径0.1~0.2mのピットが2個付随している。竪穴状遺構2・3は隅丸方形、もしくは梢円形プランを呈し、一辺が3m程の規模と考えられる。

b. 1-A窯跡

1号窯跡焚口より約5m西方に位置し、主軸方位を1号窯跡より若干西へふたっている。

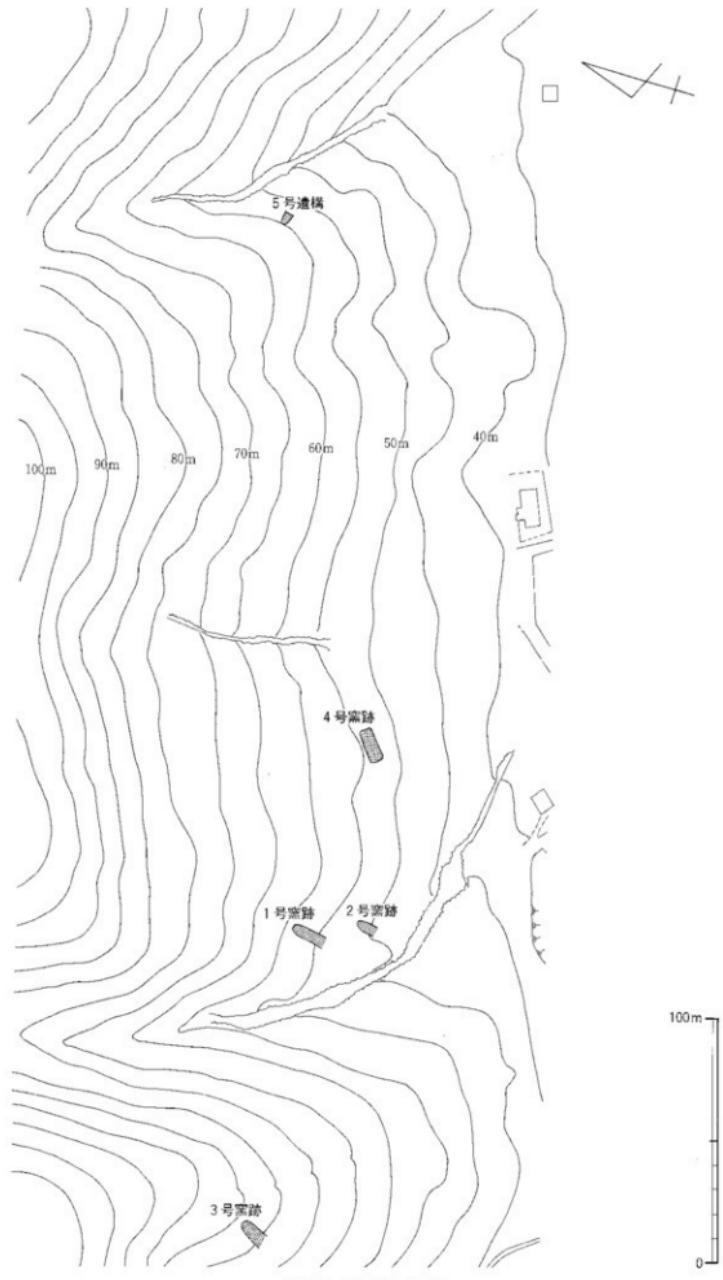
全長1.2m、床面最大幅0.29mと非常に小形ながらも、窯としての機能を有しておらず、床面と壁面は赤く焼けてしまつてゐる。

また、小規模ながら灰原も存在してゐる。床面は平滑で約3°の傾斜をもち、窯体最深部で0.37m立ち上がる。土器器の小皿を焼成しているようであるが、出土遺物は極めて少量である。

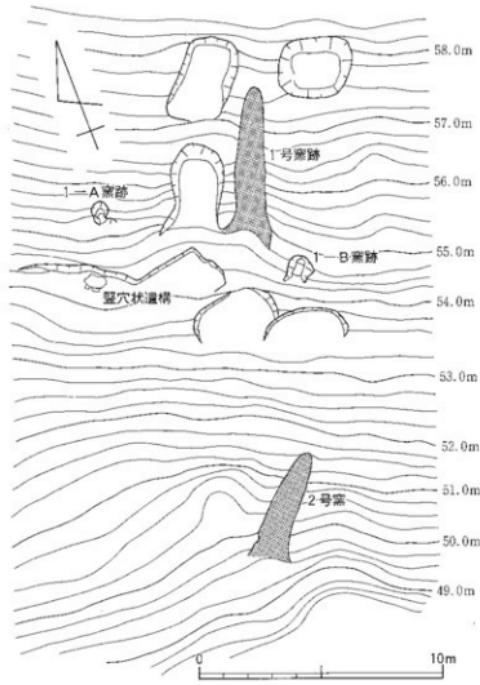
c. 1-B窯跡

1号窯跡焚口下方より約3m東方に位置し、主軸方位を1号窯跡より若干東へふたった、前述の1-A窯跡と同様の小形窯である。

全長1.05m、床面最大幅0.39mを測り、赤色に酸化している。床面は平滑で約15°の傾斜をもち、窯体最深部で0.28m立ち上がる。少量の土器質小皿が出土している。



第3図 遺構全体図



第4図 1号窯跡と2号窯跡

第2節 2号窯跡

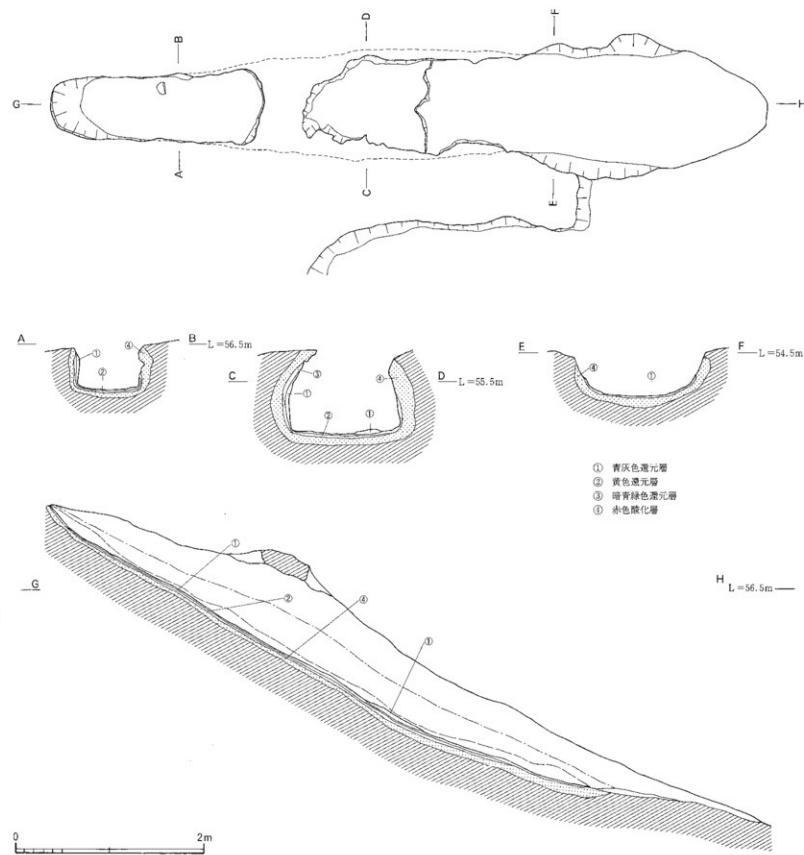
1号窯跡と同一斜面に位置し、比高で3.5m下方に立地している。

窯は全長4.85mの半地下式の窯窟であり、焚口端部は左右に大きく開く。また、窯の残り状態は極めて悪く、壁の立ち上がりも低い。

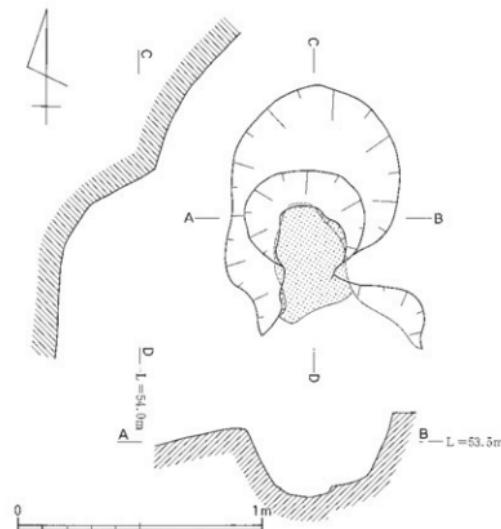
窯体の幅は焼成部で1.2m、先端部で0.95mを測る。また、側壁は焼成部で0.3m、先端部で0.2m残存する。床面の傾斜は約27°で、窯体主軸の方針N-41°-Eである。断ち割り調査の結果、床面は一枚であり、壁面での補修痕跡も認められない。

2号窯跡の灰原は、大半が谷部の流水によって消失しており、現存する灰原はごくわずかで、2号窯跡の須恵器の上に、1号窯跡の須恵器が被っている。

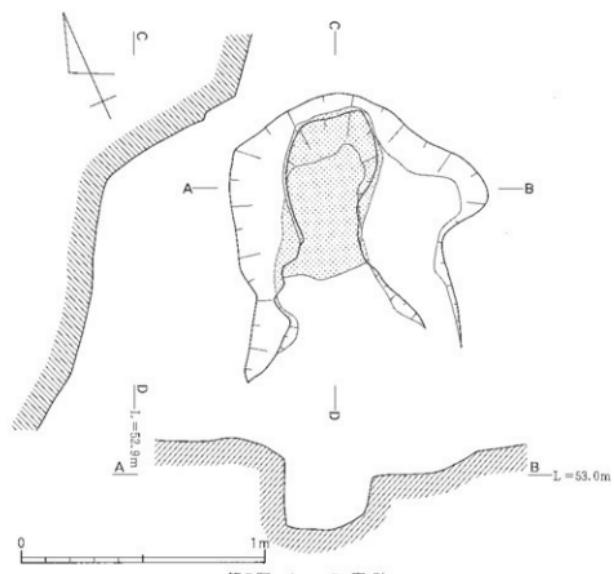
遺物の上から考えられる時間差は400年程度であり、下方から上方への変遷と共に、窯焼きの原料材である薪の自然復原の時間が、遺物の時間差とも考えられる。



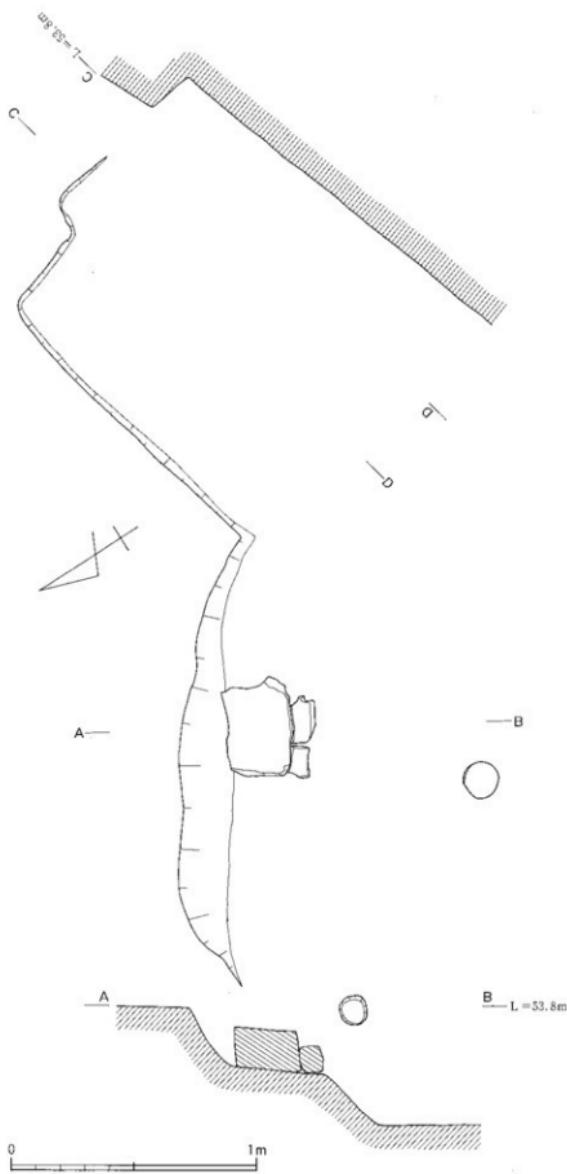
第5图 1号墓室素体图



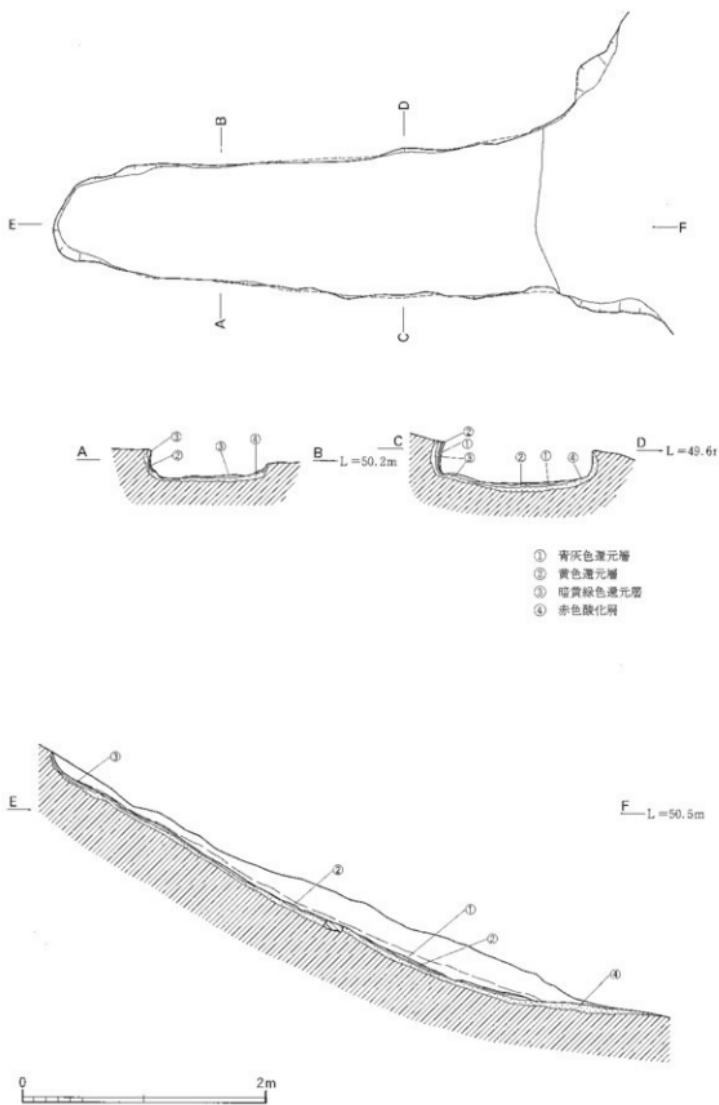
第6図 1 — A 痕跡



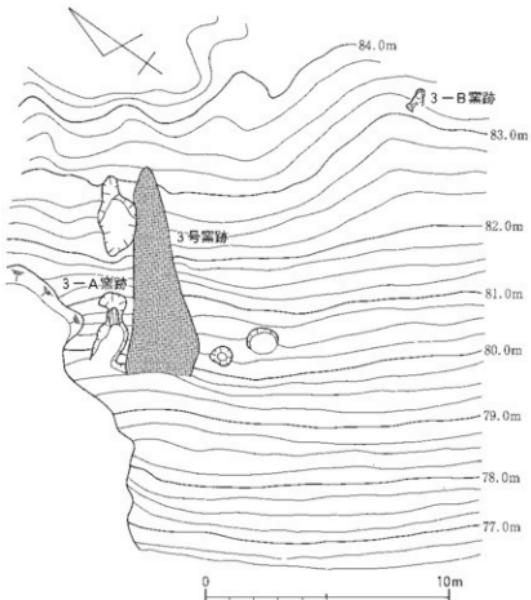
第7図 1 — B 痕跡



第8図 整穴状遺構



第9図 2号窯跡窓体図



第10図 3号窯跡

第3節 3号窯跡

調査地区の西端に位置する窯で、1・2号窯跡とは谷を挟んだ西の山頂付近の、南に延びる尾根の南西向き急斜面に立地している。

この窯には、2基の小形窯が付随してみられる。

1. 3号窯跡

窯は全長8.3mの半地下式の窯業であり、残り状態は極めて良好である。

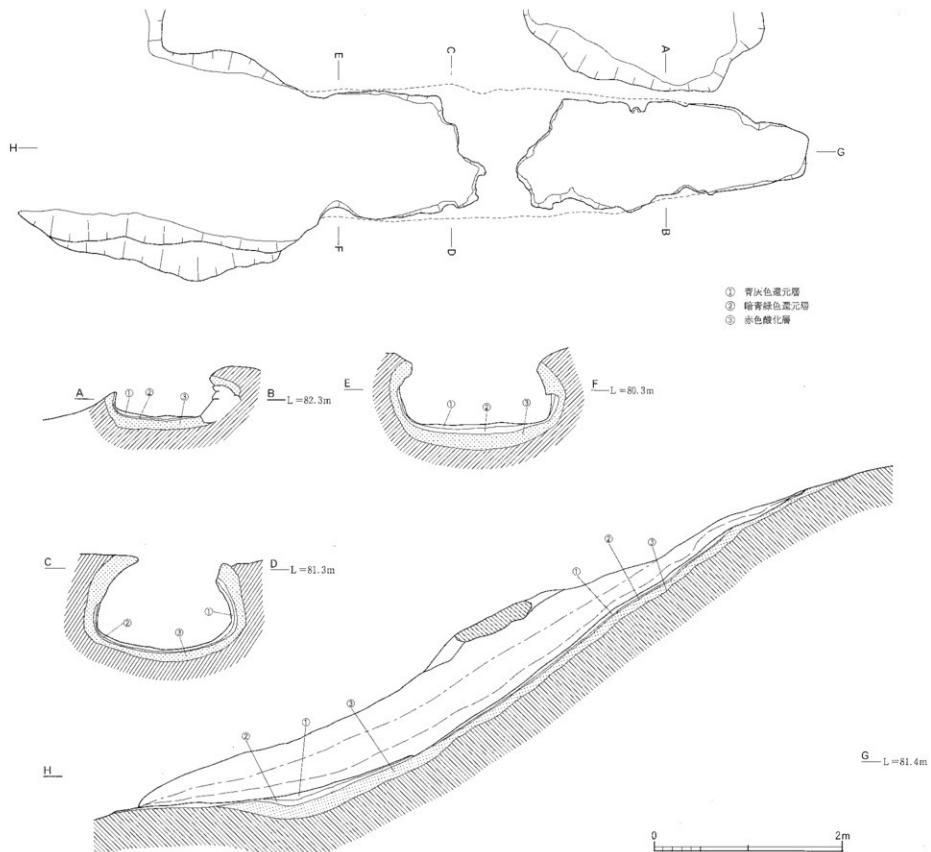
窯体の幅は焚口で1.4m、焼成部で1.4m、先端部で0.9mを測る。全長の割に幅の狭い、細長い感じの強いものである。側壁は焚口で0.4m、焼成部で0.5m、先端部で0.4m残存する。

窯体の天井部は、中央やや先端寄りに0.8mの幅で残存しており、床面からの高さは0.6mを測る。

床面の傾斜は約32°で、窯体主軸の方針はN-50°-Eである。断ち割り調査の結果、床面は1枚であり、壁面での補修の痕跡は認められない。

急傾斜面上に構築するのを考慮してか、主軸は等高線に直交させず、わずかにふって勾配を緩和させる努力の跡が伺える。

灰原は比較的良好に残っており、また、急斜面上であるため、遺物の散布は広範囲である。



第11図 3号駅跡窓体図

2. 3-A 窯跡

3号窯跡と主軸をほぼ平行させ、西に隣接する小形の窯である。

赤色に酸化した床面が3箇所、ほぼ直線上に並び、窯体はほとんど失われているが、全長3.6m前後、幅0.4m、床面傾斜約 20° と推定される。前述の1-A窯跡、1-B窯跡とは規模を異にしている。

窯体からは生焼けの平瓦の他、土師質の小皿・椀が出土しているが、瓦は窯の構築に利用されたものと考えられ、他の小形窯同様に、土師質の小皿・椀を焼成する窯であろう。

3. 3-B 窯跡

3号窯跡より約11m東に位置する。前述の1-A窯跡、1-B窯跡と同一の小形窯である。

赤色に酸化した窯体は、全長0.47m、幅0.27m、床面傾斜約 12° を測り、手前は浅いピット状となり炭層が堆積している。他の小形窯同様、土師質の小皿・椀が出土している。

第4節 4号窯跡

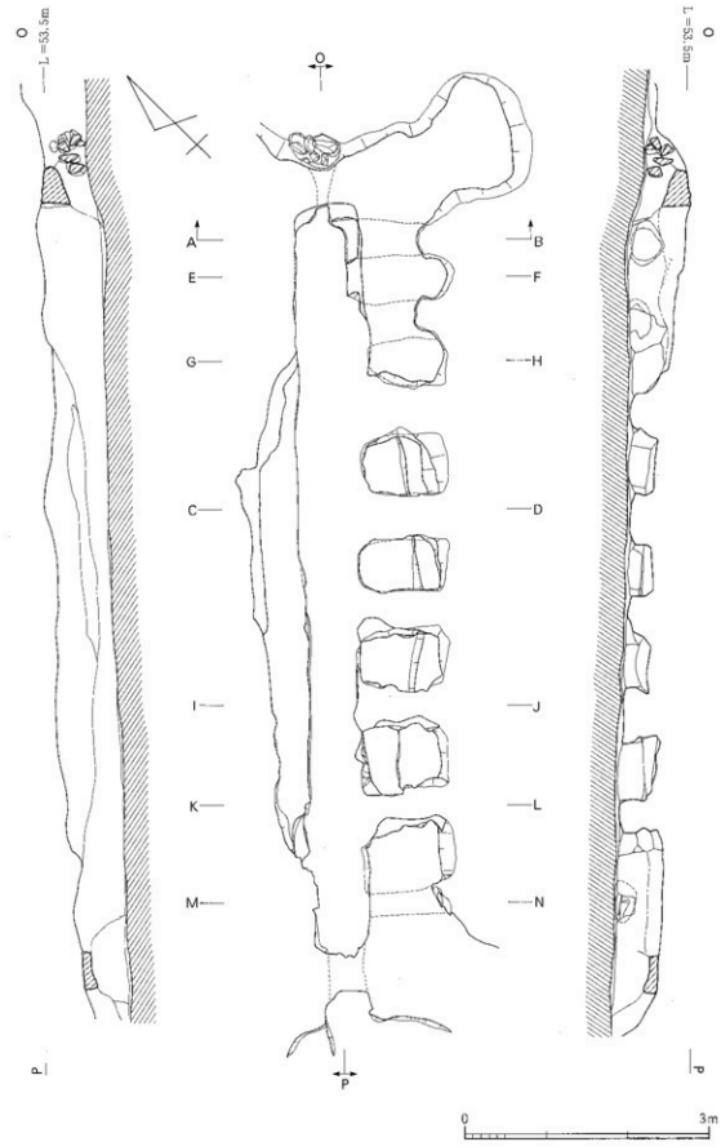
製鉄操業に必要な燃料として木炭を供給したと考えられる製炭窯である。

南向きの約 15° の緩斜面に、等高線とはほぼ並行、もしくは東端をわずかに北の高位に主軸を設定している。主軸は、北から 62° 東偏している。窯体は西方に焚口と前庭作業面をもち、東方に煙道と石組みの煙出し孔を設けている。また、斜面谷側、すなわち南方の側壁部に8孔の横口をもち、この横口の南は側庭作業面として平坦面を形成している。

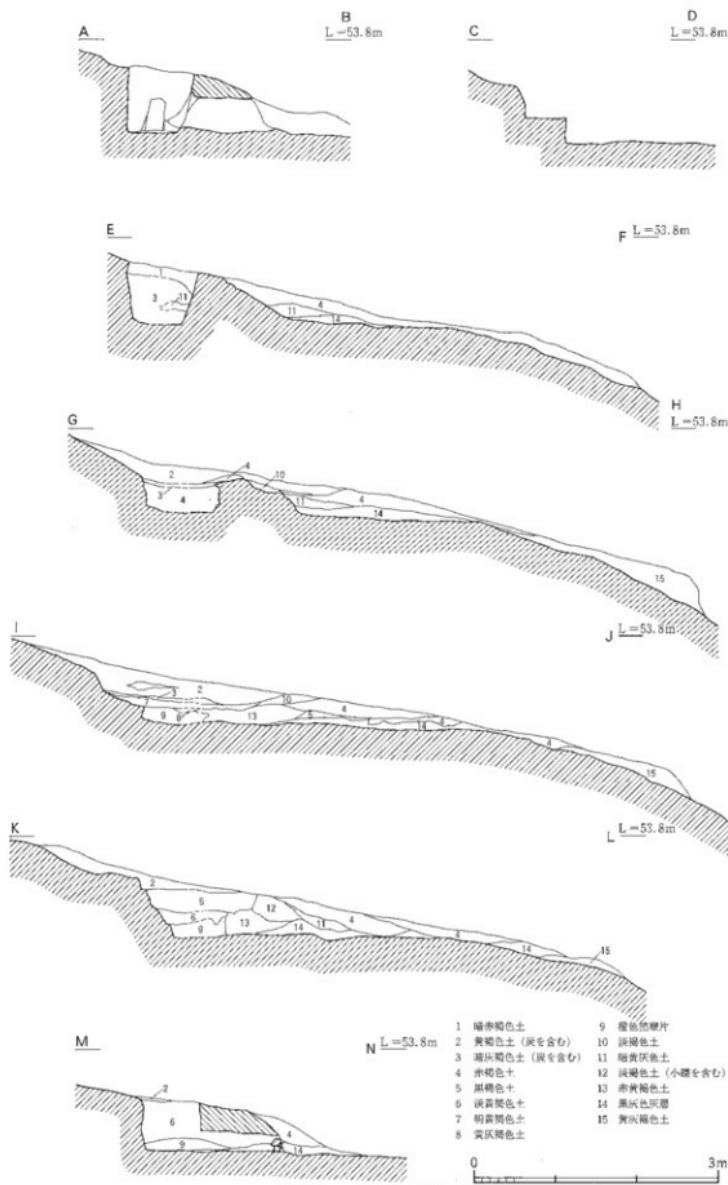
焼成部全長は9.4m、焼成部幅は0.6~0.8mである。窯体は地山を溝状に掘り抜いた半地下式で、山側壁高は煙道付近で0.7m、焼成部中央で0.2~0.4mではほぼ垂直に立ち上がり、谷側壁高は焚口付近で0.6m、煙道付近で0.7m、焼成部中央で0.2~0.3mはかる。ただし、谷側壁の地山の残存は0.3~0.4m前



第12図 4号窯跡



第13图 4号煤层断面图



後であり、その上は粘質土を貼って天井を構築している。この壁面は全体に均一して加熱を被っており、赤変して硬化が著しい。焼成部床は焚口から煙道にかけて約2°の傾斜で微妙に高まる。さらに、煙道内は狭まり、床面の傾斜は増加する。焚口付近の床面は、周囲に比べて約3cm程度浅くくぼんでいる。床面は灰色に固く焼けしまっており、還元状態に保たれたことを示している。また窯体内には、天井の形状を示す焼土ブロックが崩落して堆積している。

焚口は焼成部の西端にあたり、側壁がわずかに内側に収縮して、高さ約45cm、幅約45cmの不整な円形をなし、天井部が残存している。この焚口の西には前庭作業面の平坦地が掘り込まれており、前庭と側庭の作業面の境界は土壌状の高まりとなって南方へ張り出している。焚口を閉塞する石材は認められなかつたが、後ろの前庭作業面より、15cm前後の角礫が出土している。加熱による赤変はドーム状の焚口側壁と、焚口と前庭作業面の境界にまで及んでいる。

8孔の横口を、焚口側から第1横口、第2横口と順次呼称する。このうち、第1横口、第7横口、第8横口では天井部が残存している。第1横口は高さ25cm、幅30cmを測り、その他の横口と比べて小振りである。この横口には、側庭作業面の側に長さ25cm、厚さ5cmの偏平な角礫が充填されているが、閉塞状態ではない。第1横口以外の横口は、幅40~60cmを測り、天井の残る第7横口と第8横口では、高さは30~35cmである。また、第2横口から第8横口までの7孔の横口では、焼成部内面に向けて大きく開口し、側庭作業面の開口幅はやや狭いようである。これら横口の床面は、焼成部床面に比べてごくわずかにくぼんでいることが確認された。

焼成部に平行して横口側に幅約3mの側庭作業面が作り出されている。ほぼ平坦面をもつように構築されているが、南方は自然地形のままに降下してゆき掘り込んだ痕跡はとどめていない。この作業面には、横口の最下層から継続する黒灰色の炭層が広がり、窯体から横口を通して製品を焼き出したことが認められる。炭の上層には、天井の形状を示す焼土ブロックが堆積している。

煙道は焼成部東端の床面から掘り抜かれ、外方の煙出しに通じる。煙道は高さ40cm、幅20~30cmを測る。焼成部からの形態は台形をなしており、煙出しに向けて広く開口する。煙道の東半は外方の煙出しにかけて、長さ10~30cmの角礫を10個程度充填して閉塞している。煙道、煙出しともに十分に加熱を受けて、赤変硬化しており、また閉塞の石も加熱の痕跡が著しい。煙出しと側庭作業面の境界は、焚口との境界と同様に土壌状に南方へ張り出している。

煙出し部の東には、長さ4.7m、幅1.5~2.2m、深さ25cmの隅丸長方形の土壌がある。窯体焼成部の延長上にあたり、土壌の主軸は窯体のそれにはば等しい。土壌内には、炭粒が混入した黄褐色土が堆積しており、窯体に付随する施設と考えられる。

焼成部の最上層で平安時代の須恵器碗の細片を検出したが、後世の混入と判断され、窯跡の帰属時期を示す資料ではない。また、須恵器形陶片が近傍から出土しているが、窯跡との関連性は認めることができない。

第5節 5号遺構

調査地区の東端に立地し、北東に延びる谷部の南向き斜面に位置する。

遺構は4.6m×1.7mの長方形プランを呈する竪穴状遺構と、長軸1.7m、短軸0.8mの不整梢円形プランの焼上塗よりなる。

4号窯跡とは直線距離で220m隔てて位置しており、その間には何ら遺構は検出されていない。

堅穴状遺構は長辺側が、北西から南東へ傾斜している。底部は地形に合わせて傾斜しており、傾斜に合わせた状態で平坦になっている。また、短辺側は少しくぼみがちに、平らになっている。

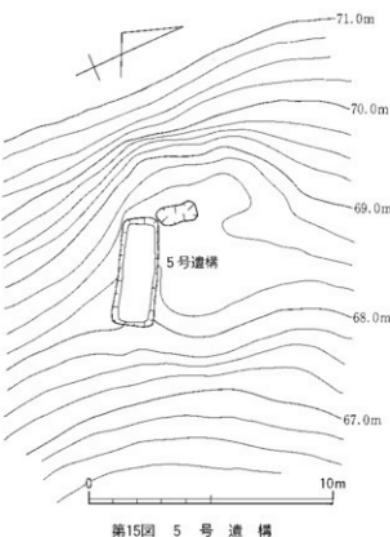
不整格円形の遺構は、堅穴状遺構の北隅に、あたかも接するかのように、北に向かって延びる。底部は浅く、残存状況は悪い。

いずれも床面は赤く焼けしまっており、遺構内からは、若干の炭層も検出されている。また、炭に混じって、スラグのかすも検出されている。

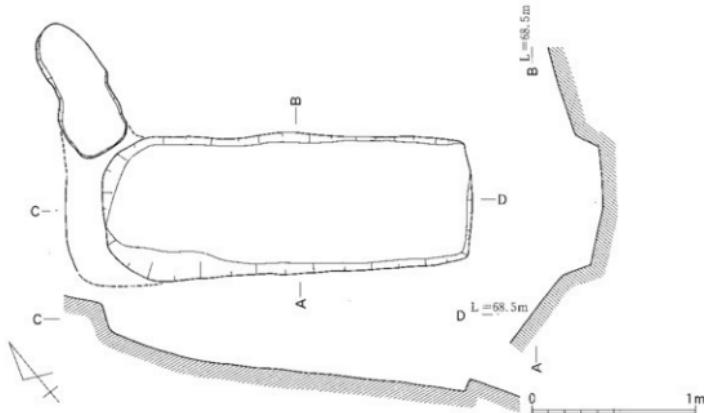
遺物として、須恵器の長頸壺が1点みられる程度で、時期を考えることのできる唯一

のものであり、これから考えられる時期としては、奈良時代と思われる。

5号遺構単独で、遺構の性格等を考えることは不可能であるが、4号窯跡との関連から考えると、4号窯跡が、近年報告の増加している、所謂白炭焼成窯であることから、製鉄時に使用する燃料の窯と、製鉄関連の窯とも考えられ、何らかの製鉄に伴う作業が、この地で行われていたと思われる。



第15図 5号遺構



第16図 5号遺構平面図

第4章 遺物

第1節 遺物の概要

出土した遺物は、1号窯跡が須恵器、土師器、瓦、2号窯跡が須恵器、3号窯跡が須恵器、土師器、瓦である。さらに、4号窯跡周辺で陶棺、5号遺構周辺で鉄滓が出土しているが明らかに遺構に伴うものではない。1号から3号までの窯跡は、資料を須恵器・土師器と瓦にわけて、また窯体と灰原を明示したうえで記述してゆく。

第2節 須恵器・土師器

出土土器の中では須恵器が圧倒的に多数を占めており、土師器はわずかに数点にすぎない。須恵器には、椀、杯、杯蓋、皿、壺、甕、鉢がある。1号窯跡と3号窯跡では椀が主流をなし、時期が遅る2号窯跡では杯と杯蓋が焼成されている。

• 1号窯跡 窯体出土土器

椀、皿、壺、鉢が出土している。

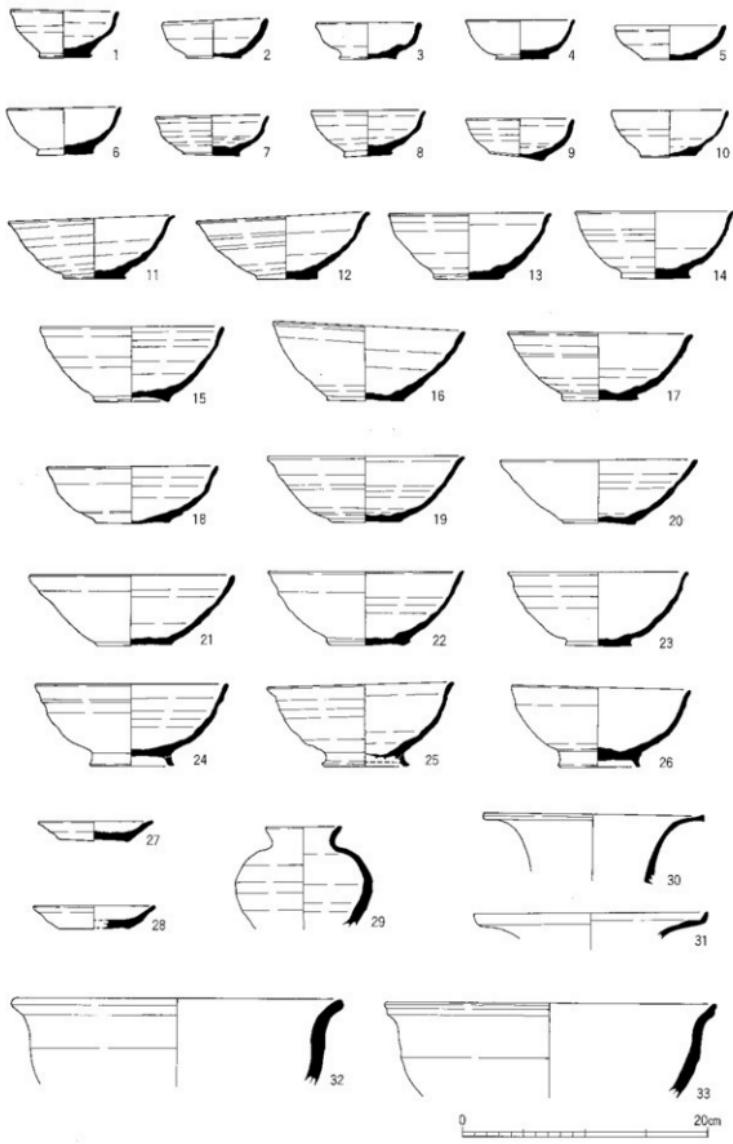
椀は回転糸切りの平高台をもつものと付高台を貼りつけるものがあり、前者が主体をなしている。平高台は糸の切り離しのまま放置されており、その前面には調整は施していない。体部は底部から斜め上方に立ち上がり、わずかに内済気味に延びる。外面は回転のナデによる凹凸が激しい。口縁部は端部をわずかに外反せるものとそうでないものが存在する。また、口径が8.5~9.5cm前後、器高が3.0~4.0cm前後の小型のものと、口径が13.0~16.0cm前後、器高が5.0~6.5cm前後のものに分離が可能であり、前者を椀a、後者を椀bと呼称する。付高台を貼りつけるものは、椀bに限定される。さらに、後者は口径が13.0~14.0cm前後、器高が5.0cm前後のものと、口径が14.5~16.0cm前後、器高が5.5~6.5cm前後のものに分離が能性があるが、法量の差は少ない。前者を椀b 1、後者を椀b 2とする。

1から10は椀a、11から26が椀bで、後のうち24、25、26糸切りの後に外方に張り出す付高台を貼りつける椀である。椀aは1や3のように体部が屈曲して口縁が立ち上がるものとそうでないものがある。椀bは平高台をもつが、15のようにわずかに上げ底状を呈するものも認められる。11から14は口径の平均が13.2cmで、椀b 1である。口縁端部をわずかに外反せるものがある。付高台は平高台の外端部に粘土紐を廻らせて仕上げ、短く外に向かって延びる。ただし、外方への張り出しは甘く、華奢な印象が強い。

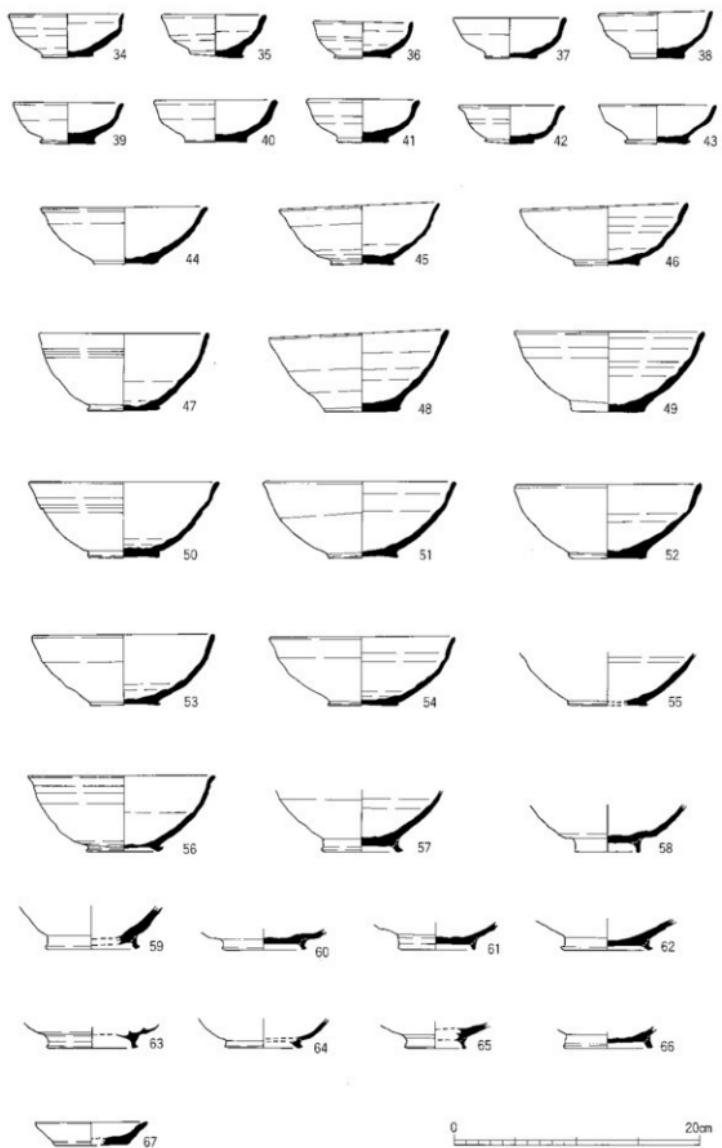
皿は口径が8.5~9.5cm前後、器高が2.0cm前後、底径が5.5~6.0cm前後である。焼成が不良で、生焼けの状態のものも認められる。

29は小型の短頸壺である。ほぼ球形の体部に、屈曲して短く開く口縁部になる。口径は6.1cm。30と31は広口壺である。30は頸部が単純に外反して開き、口縁端部をわずかに拡張している。31は口縁端部をつまみ上げている。

32、33は鉢である。口径はそれぞれ27.0cmである。口縁端部を丸く收めるものと、つまみ上げるものがある。



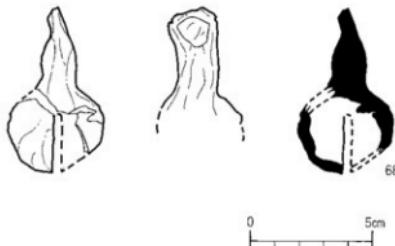
第17図 1号窯跡 実体出土土器



第18図 1号窑跡 灰原出土土器 1

• 1号窯跡 灰原出土土器

34から43は椀a、44から66は椀bである。椀aは42のように口縁端部をわずかに外反せるものも認められる。法量からみて、44から46は椀b 1、45から66は椀b 2である。椀b 2のうち56から66は付高台を貼りつけるものである。この付高台は定型化。全長は6.8cm、径約4.0cm



第19図 1号窯跡 灰原出土土器 2

の腹部と長さ3.3cmの鉢部からなり、金属製の鉢を模倣して全体に瓢形を呈する。腹部はほぼ球形で中空、外面には腹帯や文様、透孔は認められない。厚さは0.3~0.7cmである。本来、内部に須恵質の丸を保有していたと考えられるが、腹部が破損しているために現存しない。下半の鉢口は0.4cm前後の幅の長さ2.4cmの切目となる。鉢部は比較的長い棒状をなし、基部は太く中実である。上部先端は片面が凹状をなし、穿孔はなされていない。外面はナデと指押さえで調整されている。胎土に砂粒を含み、焼成は普通である。

• 2号窯跡 窯内出土土器

杯と杯蓋が出土している。出土量は1号窯跡に比べ少ない。

69から97は窯内の床面に密着した資料であり、98から106はその他の窯内出土須恵器である。

69から89は杯Aである。口径は14.5cm前後を平均として、最小14.0cm、最大15.5cmである。器高は3.2~3.8cmである。高台をもたず、体部から口縁部にかけて直線的に外上方へ延びる。底部は平らですべて不調整、体部と口縁部は外面ともに回転を利用したナデで調整し、内面底部には仕上げナデを施している。すべて胎土には砂粒を含んでいる。焼成は不良で、色調は灰色を呈するが、69~71、86は焼成普通で、青灰色をみせている。

90から94は杯B蓋である。頂部は平らで、粗い回転ヘラ削りし、中央が凸状のつまみを付す。口縁部は端部近くで屈曲し、わずかに凹状をなして直下に下る。縁部は丸く仕上げている。口縁部と内面は回転を利用したナデで調整を行い、中央部には仕上げナデを施している。胎土に砂粒を含み、焼成は良好である。口径は15.4cm~20.3cmとばらつきがある。

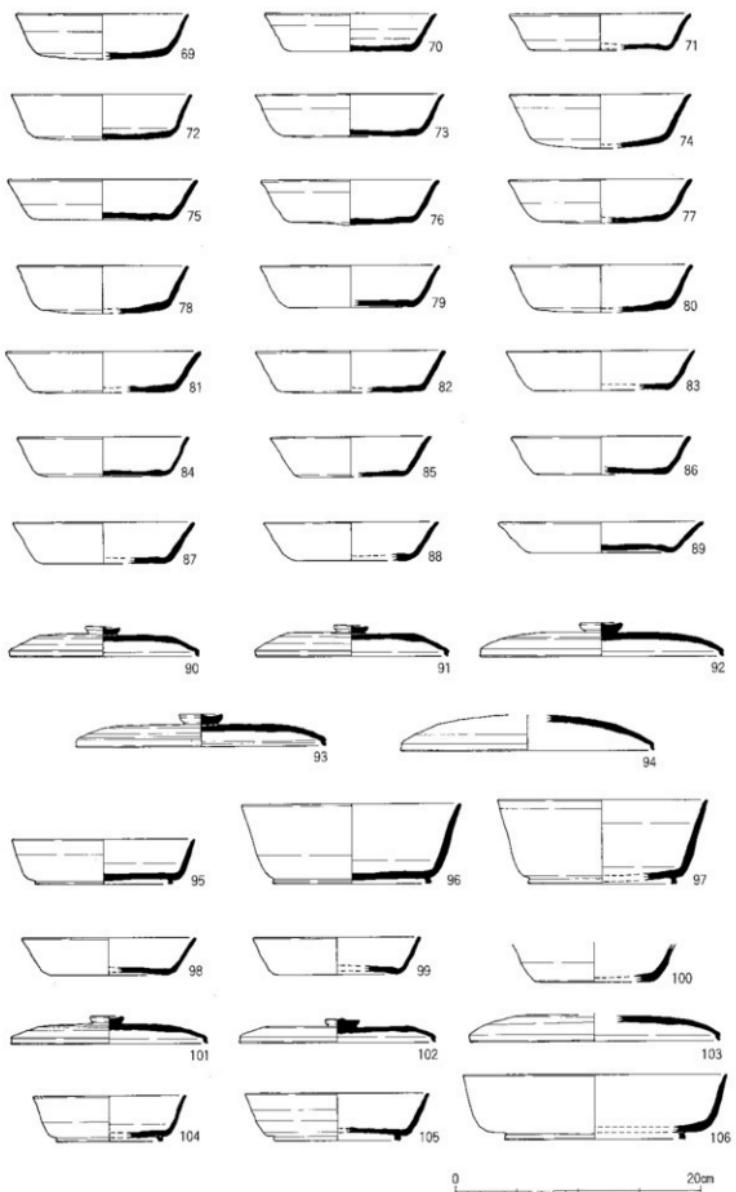
95から97は杯Bである。形態は杯Aと変わらない。底部はヘラ削りを行い、体部は回転を利用したナデを施す。高台は短いハの字形で、底部端より内側に付され、縁部はわずかに肥厚する。95は口径が14.8cm、器高が3.7cmと浅い。96と97は体部が深く、器高は6.5cmと6.9cmである。

98から100は杯Aで、口径は14.4cmと13.8cmである。101から103は杯B蓋で、101は口径は16.0cm、103は20.3cmである。104から106は杯Bである。

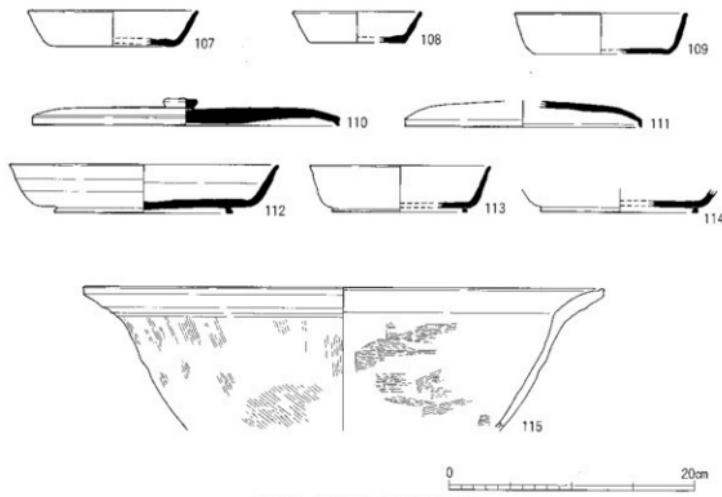
• 2号窯跡 灰原出土土器

須恵器杯と杯蓋、土師器が出土している。

107から109は杯Aである。108は口径が10.6cmと小振りである。109は焼成が不良で、灰白色を呈する。



第20図 2号窯跡 窯体出土土器



第21図 2号窯跡 灰原出土土器

110と111は杯B蓋である。110は口径が24.8cmと大きく、器壁も厚い。胎土に砂粒を含み、焼成は普通。

112から114は杯Bである。112は高台が底端部から約2.0cm内側に付けられている。114径は21.8cmである。113は口径が14.7cm。いずれも焼成は普通で、青灰色を呈している。

115は土師器の鉢である。直線的に聞く体部からわずかに屈曲して外上方に口縁部が伸びる。端部はわずかにつまみ上げられている。外面は斜め方向、内面は横方向の刷毛で調整を行う。焼成は普通で、胎土に砂粒を多く含み、浅黄橙色を呈する。口径は42.3cmである。

• 3号窯跡 窯体出土土器

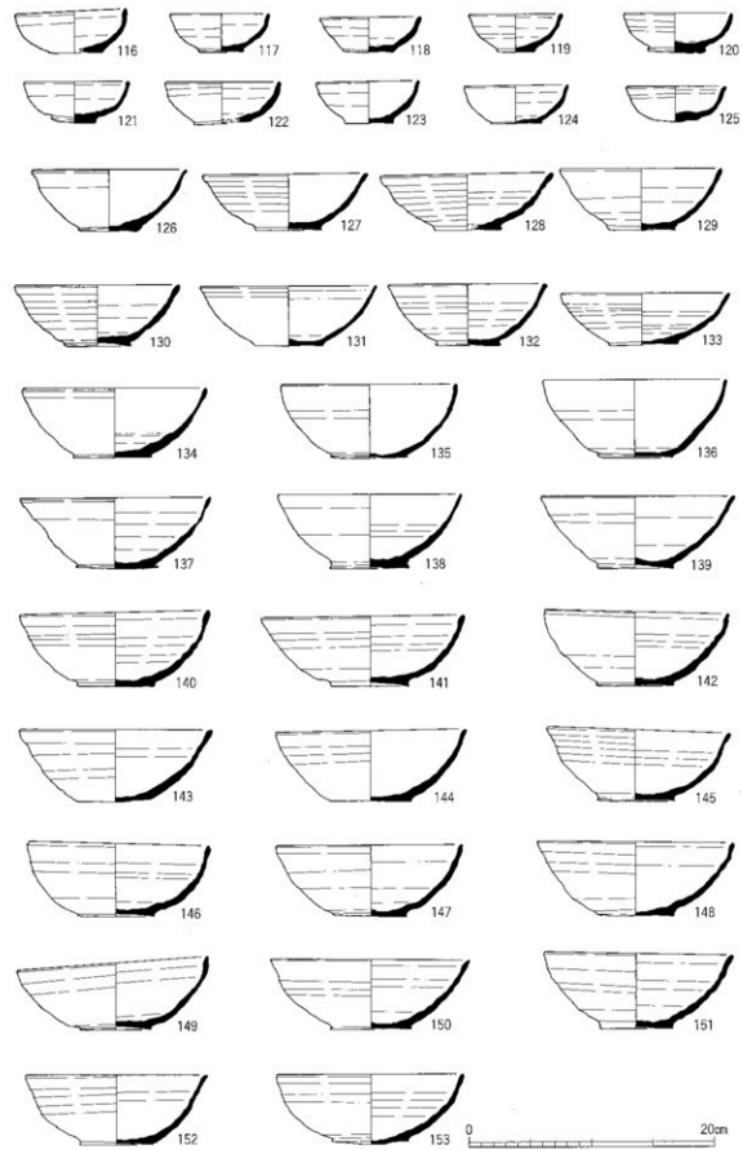
椀、皿、壺、鉢が出土している。

116から125は小型の椀aである。口径は119の7.4cmを最小として、8.0~8.7cmに集中している。

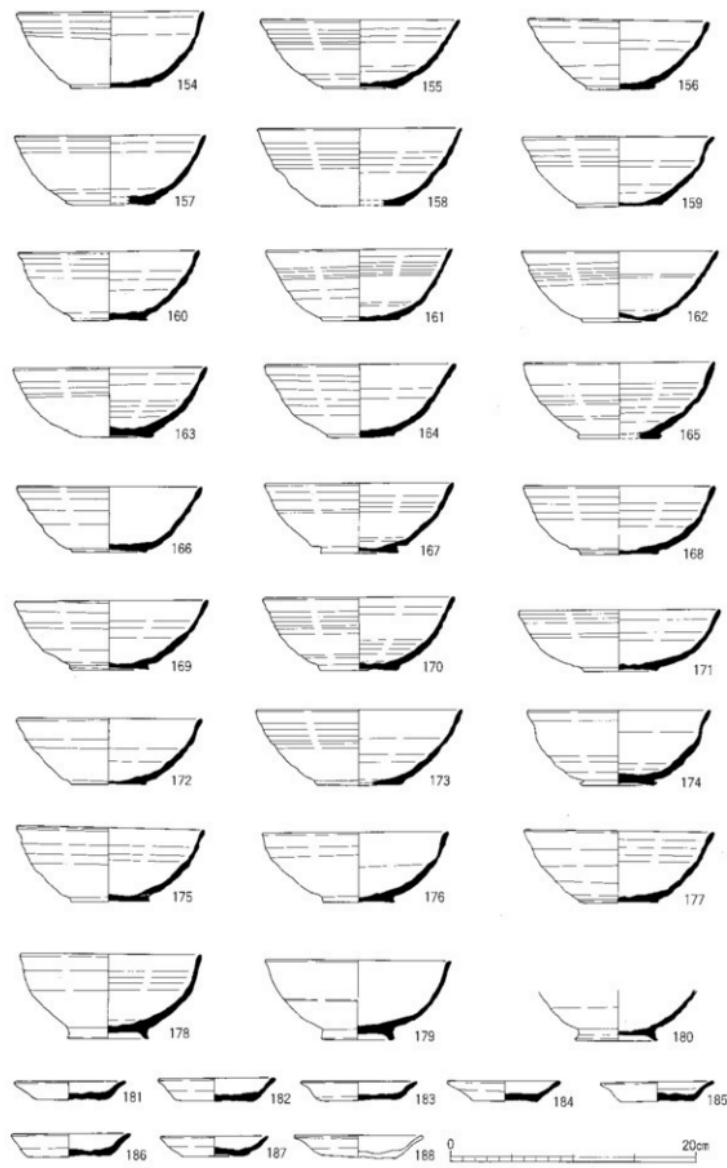
焼成は116が不良で灰色を呈しているが、他は良好である。底部は糸切りの平高台であるが、125のみ不調整である。120は底部内面に仕上げのナデを施している。121と123では一部に自然釉の付着が認められる。

126から180は椀bである。このうち126から133は口径の平均値が13.4cmを測り、椀b 1に分類される。133は器高が4.2cmで比較的浅い。131と133は底部内面に仕上げのナデを施している。多くは焼成不良で、灰黄橙色や灰色を呈する。134~180は、口径が14.5~16.0cm前後、器高が5.5~6.5cm前後の椀b 2である。体部内外面ともにナデによる凹凸が著しい。底部はすべて回転糸切りの平高台であるが、178・179・180は付高台を貼りつける。

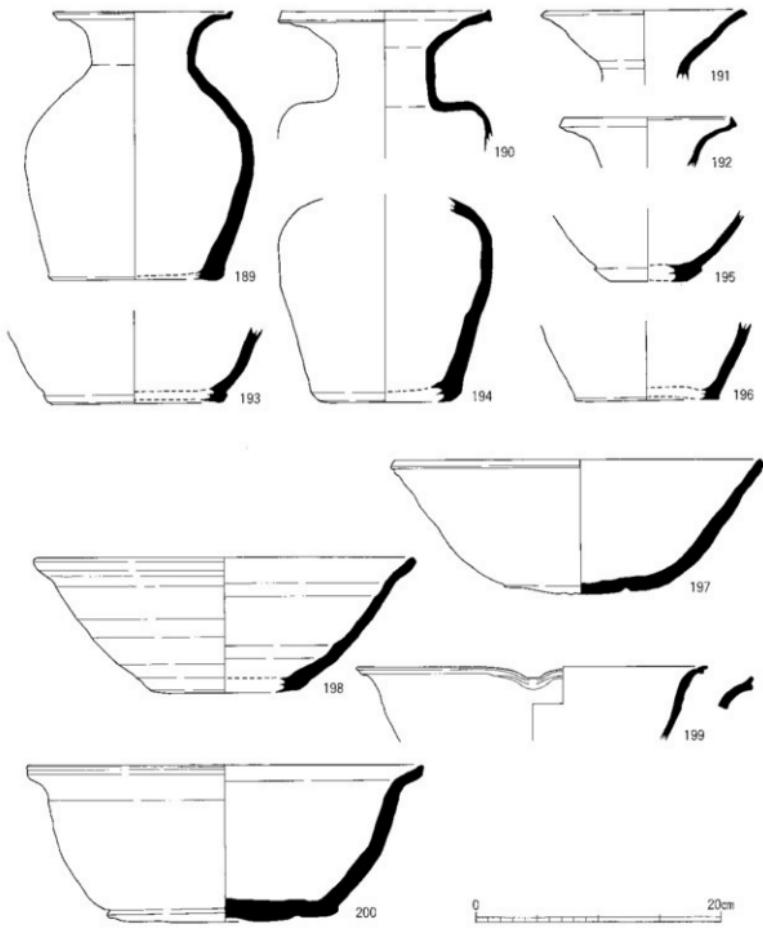
181から188は小皿である。このうち188は土師器であるが、その他は須恵器である。口径は8.6~9.5cmを測り、底部はいずれも回転糸切りを施す。



第22図 3号窯跡 窯体出土土器 1



第23図 3号窑跡 瓷体出土土器 2



第24図 3号窯跡 窯体出土土器 3

189から196は壺である。189は胴部中位に最大径をもつたな肩の体部に、外へ開く口頭部が続き、口縁端部はつまみ上げられる。口径14.3cm、器高21.9cmである。190は口縁下端が突唇状をなし、口径は16.9cm。191と192は、口径はそれぞれ16.7cmと14.0cmである。193以下は、いずれも蓋の底部と考えられる。

197から200は鉢である。197は底部と体部の境界が明瞭ではなく、口縁端部は平坦、口径は29.7cm、器高は11.0cmである。焼成は良好で、胎土に砂粒を含む。198は口縁がわずかに外へ屈曲し、端部は丸く取れる。口径29.8cm、器高11.1cmである。199と200は、口縁がわずかに外反し、端部が上方につまみ上げられるものである。口径はそれぞれ、28.9cmと32.0cmを測る。特に200の底部は2.0cmと厚く、外側

は整形が施されてはいない。

• 3号窯跡 灰原出土土器

椀、皿、壺、鉢が出土している。

201から210は小型の椀aである。口径は203の8.0cmを最小として、8.4~8.7cmに集中している。焼成は203が不良で灰色を呈しているが、他は普通もしくは良好な状態である。底部は、すべて糸切りの平高台であり、径は208が最小の3.6cm、205が最大の4.8cmである。器高は3.0~4.2cmで比較的多様である。胎土に細砂粒を含む。

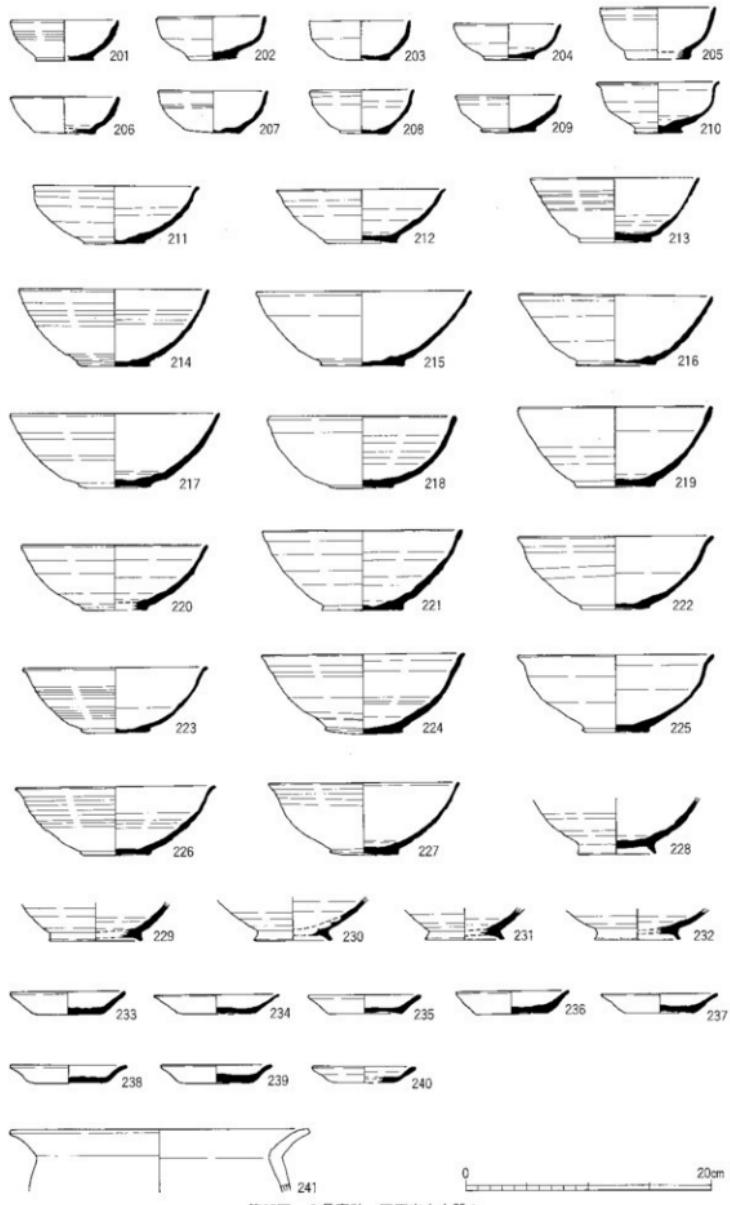
211から232は椀bである。このうち211から213は口径の平均値が13.4cmを測り、椀b1に分類される。212は器高が4.4cmであるにもかかわらず、底径は6.1cmと大きく、比較的浅い造りに見える。214から232は、口径が14.5~16.0cm前後、器高が5.5~6.5cm前後の椀b2である。体部内外面ともにナデによる凹凸が著しい。底部はすべて回転糸切りの平高台であるが、229・230・231は糸切りの後に外方に張り出す付高台を貼りつける。

233から240は小皿である。すべて須恵器である。口径は8.3~9.9cmを測り、底部はいずれも回転糸切りを施す。いずれも焼成は比較的良好である。

241は土師器の壺である。頭部が単純に屈曲し、口径は24.0cm。表面は摩滅が進行し、調整は不明である。

242から253は壺である。このうち、242から246はくの字に屈曲する短頸壺としておく。242と243は口径が11.6cmと16.0cmの小型のものである。いずれも屈曲部外面に指押さえの痕跡を残し、焼成は極めて不良である。244から246は、比較的大型の壺である。244と245は、外面に左上がりの叩き、内面は板状工具によるナデを施し、口径はそれぞれ、18.7cmと20.2cm、腹径は口径を凌ぐ。胎土は砂粒を含むものの精良であり、焼成はやや不良。246は外面の叩きは右上がりとなる。口径は21.0cmを測る。247から249は、短い頸部がほぼ上へ立ち上がる直口壺である。249は口径10.4cm、器高16.1cm、胴部最大径は21.7cmで、ほぼ中位にあり、ここに断面三角の突帯を巡らす。底部は丸く収まり、径13.4cmの突帯を貼りつけて、高台の様相を呈している。焼成は良好で、胎土には砂粒を含む。250から253は頸部が大きく外方に広がる広口壺である。250は口径が16.2cm、251は19.8cmである。口縁端部をつまみ上げ、外面に平坦面を形成する。252は頸部と体部上半である。肩部に断面台形の突帯を巡らせる。253は、平底の底部である。径は12.4cm。

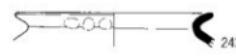
254から283は鉢である。口縁端部の形状で4種に分類しておく。端部が平坦で、面をなすものを鉢a、口縁端部の上下端部を引き延ばすものを鉢b、端部を丸く收めるものを鉢c、端部上端を上方につまみ上げるものを鉢dとする。254から258は、鉢aである。254は直線的に上外方に広がる形態で、口径29.5cm、器高10.3cmである。外面は回転ナデ、内面は不定方向の指ナデを施す。焼成は良好で、胎土には砂粒を含んでいる。255は体部の立ち上がりは急である。また、体部と底部の境界は明瞭である。口径26.8cm、器高12.0cmである。257は31.0cmの口径に比べて、底径が18.0cmと大きく、体部と底部の境界は明瞭ではない。256は口径36.2cm、258は28.4cmである。259と260は鉢bである。特に260は口縁端部下端が水平に引き延ばされている。口径は35.0cmで、器壁の断面は暗紫色を呈する。体部から底部へは丸く連続する。261から263は鉢cである。261は口径が19.8cmと小振りのものである。口縁に一箇所の片口を設ける。262は口径31.5cm。263の体部はいったん張り出し、口縁部にかけて外湾する。口径30.0cm、底



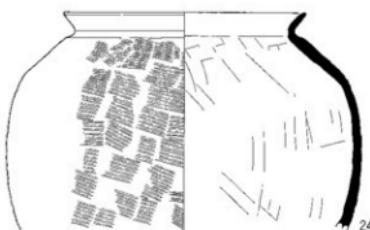
第25図 3号窯跡 灰原出土器1



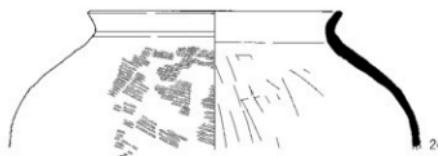
242



243



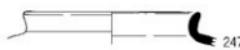
244



245



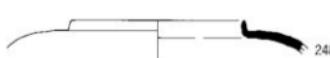
246



247



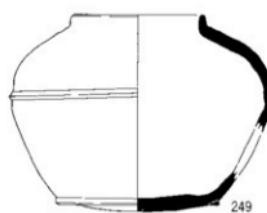
250



248



251



249



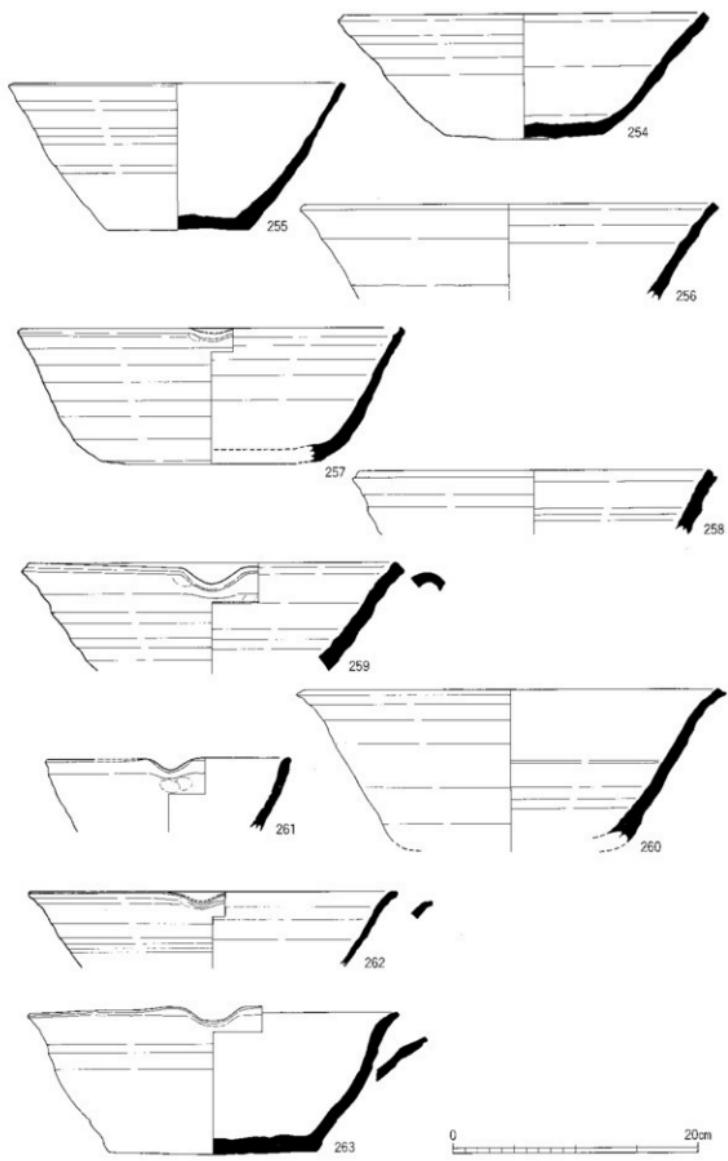
252



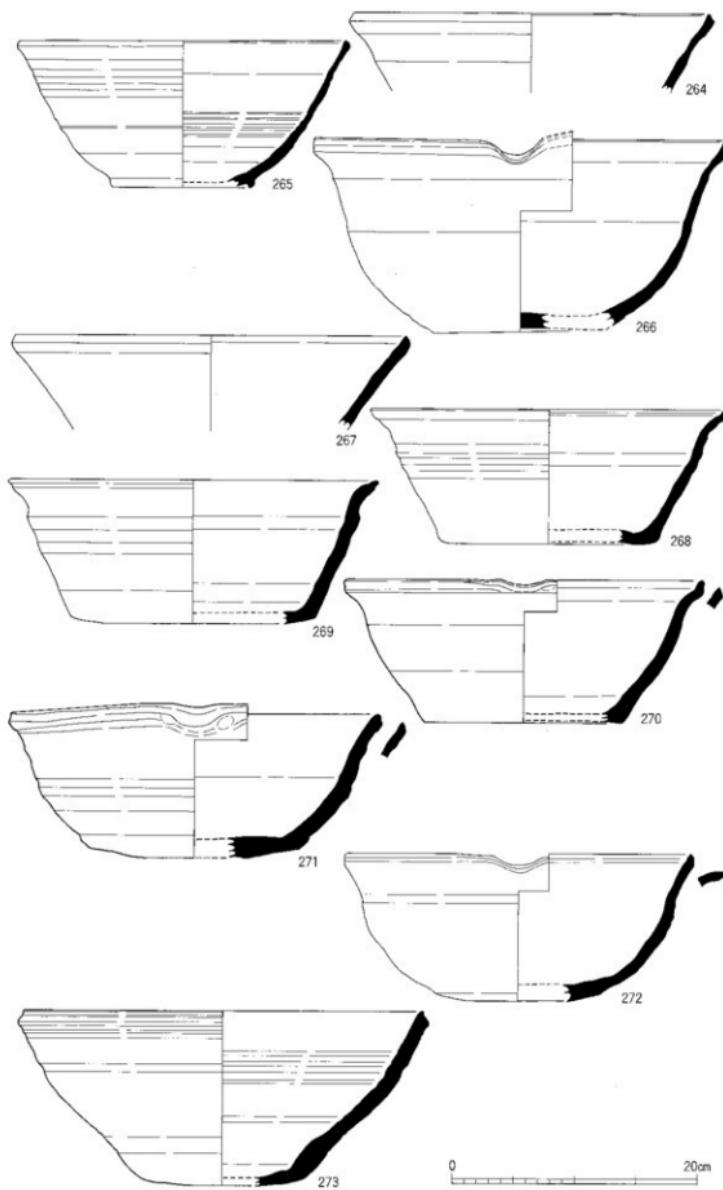
253



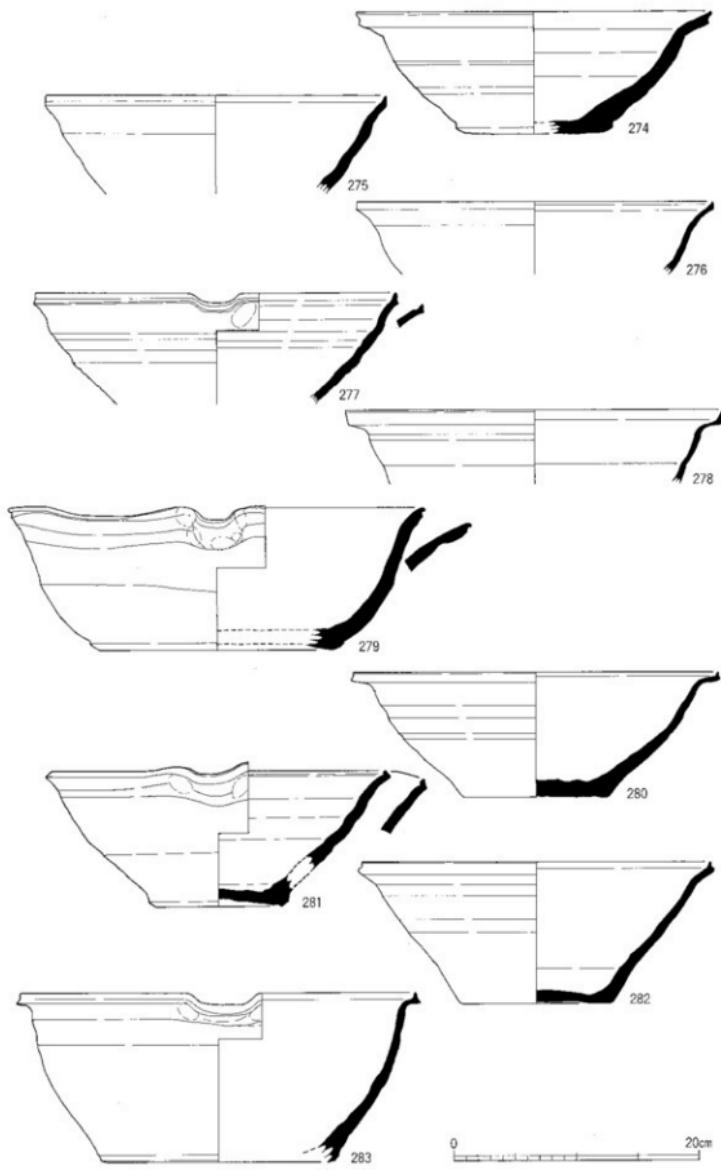
第26図 3号窯跡 灰原出土土器



第27図 3号窯跡 灰原出土土器 3



第28図 3号窯跡 灰原出土土器 4



第29図 3号窯跡 灰原出土土器 5

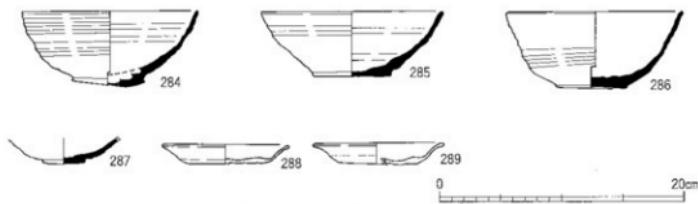
径16.9cmである。264から283は鉢dである。265は体部がわずかに張り出し、底部は高台状を呈する。口径は26.4cm、器高は11.9cmである。266は片口部を残す。焼成は不良で、歪みが大きい。口径は33.6cm、器高は16.5cmである。268と269は底径が大きく、体部の凹凸が顕著である。口径はそれぞれ28.8cmと30.0cmである。270は口縁端部が上方に大きく拡張されており、口径は29.0cm、器高は11.2cmである。272は体部はいったん張り出し、口縁部にかけて外湾する。口径は28.0cm、器高は11.0cmである。274は口縁が水平に近く屈曲し、端部をつまみ上げる。器壁は厚く、口径は29.0cm、器高は10.0cmである。279は指押され丁寧に片口を作り出す。歪みが著しいが、口径は33.4cm、器高は11.7cmに復原される。280は口径は29.8cm、器高は10.2cm、底径は11.8cmである。281は歪みが著しい。底部は上げ底を呈する。口径は27.2cm、器高は11.6cmに復原される。282の口縁端部は、上方へ突出している。大きく歪むが、口径は28.4cm、器高は11.5cmに復原される。

• 3-A 窯跡出土土器

須恵器碗と土師器皿が出土している。

284から287は、楕b2である。284は体部の凹凸が著しく、口径は14.1cm、器高は6.0cm、底径は4.2cmである。285は口径は14.8cm、器高は5.3cmである。286は体部がわずかに張り出す。口径は14.1cm、器高は6.3cmである。

288と289は小皿である。288は口縁部がわずかに外反する。口径は10.2cm、底径は6.1cmである。289は口径は10.3cm、底径は6.5cmである。



第30図 3-A 窯跡 出土土器

第3節 瓦

1号窯跡と3号窯跡から瓦が出土している。ただし、出土後にコンテナの倒壊やカードの剥離などが重なり、出土状況はもちろん窯跡を特定できない遺物が多い。

• 1号窯跡出土瓦

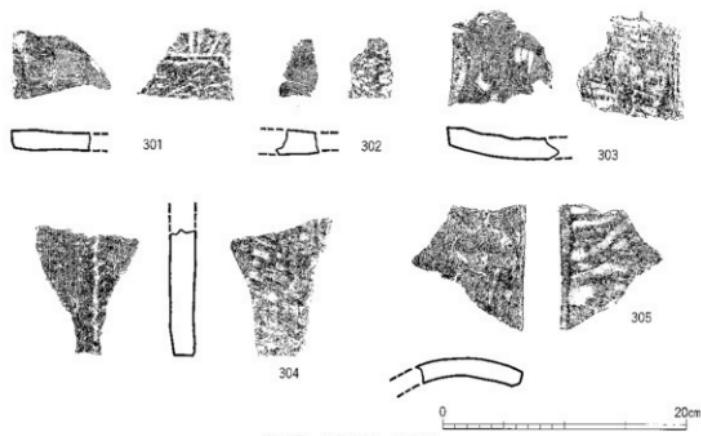
瓦は平瓦・丸瓦の小破片が認識できたにすぎない。ここでは岡化できた5点のみをとりあげる。なおここで用いている瓦の分類は3号窯跡出土の瓦の項目によられたい。

301は半瓦BⅢ類で、側面にヘラケズリ、凹面側側縁に面取りを施している。厚さは1.5cm前後、布目は1cmに6~8本である。焼成はやや不良で浅黄色を呈する。

302は平瓦BV類で、厚さは1.8cm、布目は1cmに11~12本である。

303・304は平瓦C I類である。303は側面にヘラケズリ、凹面側側縁に面取りを施している。厚さは2.0cm前後、布目は1cmに10~11本である。304は端面にケズリ、凹面の端面ぎわにナデを施している。厚さは2cm前後、布目は1cmに8~14本である。

305は丸瓦A類である。凹凸面ともに横方向のナデを施し、側面および内側縁・外側縁にケズリを施している。厚さは1.5cm前後である。



第31図 1号窯跡 出土瓦

• 3号窯跡出土瓦

3号窯跡の灰原からはかなりの数の瓦類が出土している。平瓦・丸瓦・道具瓦などが出でているが、軒瓦は出土していない。ただし文字瓦が出土していることは注目に値する。全体として良好な固体はかならずしも多くなく、全形を知ることができる資料は皆無である。

• 平 瓦

平面形は良好な個体のものはすべて長方形のものであるが、側面部が開く個体のものもあり、台形のものも存在するかもしれない。法量は横幅が34.5cm、24~26cm程度の2者があり、全長については判明する資料がない。凹面には糸切り痕、布目压痕を残し、一部には調整を施すものもある。布目は9本/1cm前後のものが多い。凸面にはほとんどのものが叩き目を残すが、一部もしくは全体に調整を施すものもある。叩きの原体はすべて鉛削されたもので、縄を巻き付けたものは存在しない。成形技法については一枚作りと思われる。以下に凸面に残された叩き目によって分類する。

A類：正格子の叩き目をもつもの。

A I類 一辺1.2cm前後の正格子の叩き目をもつ。

A II類 一辺0.8cm前後の正格子の叩き目をもつ。

B類：斜格子の叩き目をもつもの。

B I類 一辺4.0cm前後の斜格子の叩き目をもつ。

- B II類 一辺2.4cm前後の斜格子の叩き目をもつ。
- B III類 一辺2.4cm前後のやや乱れた斜格子の叩き目をもつ。
- B IV類 一辺2.0cm前後の斜格子の叩き目をもつ。
- B V類 一辺1.2cm前後の斜格子の叩き目をもつ。

C類：その他の叩き目をもつもの。

- C I類 0.6cm間隔の横線に縦線を1本通したもの
- C II類 横幅の狭い互い違いに下がる斜線で構成されるもの。

D類：叩き目をもたないもの。

- D I類 カキ目調整を施すもの。
- D II類 全体にナデ調整を施すもの。

以下にそれぞれの特徴をみていく。

平瓦A I類 (306~308) 一辺1.2cm前後の正格子の叩き目をもつものである。叩きは弧状に施されている。凹面には糸切り痕、布目圧痕を残している。側面、端面はヘラケズリされている。306・307は両側の側縁に、308は凹凸両面側の側縁に面取りを施す。凹凸両面の端縁には面取りを施す。306は横幅34.5cmと大型である。

平瓦A II類 (309~312) 一辺0.8cm前後の正格子の叩き目をもつものである。叩きは弧状に施されている。凹面には布目圧痕を残している。側面、端面はヘラケズリされている。309・310・311は凹面側縁に面取りを施す。311・312は凹面側縁に面取りを施す。

平瓦B I類 (313~315) 一辺4.0cm前後の斜格子の叩き目をもつものである。叩きは側縁に平行に施されている。凹面には布目圧痕を残している。側面、端面はヘラケズリされている。314は凹面側縁に面取りを施している。

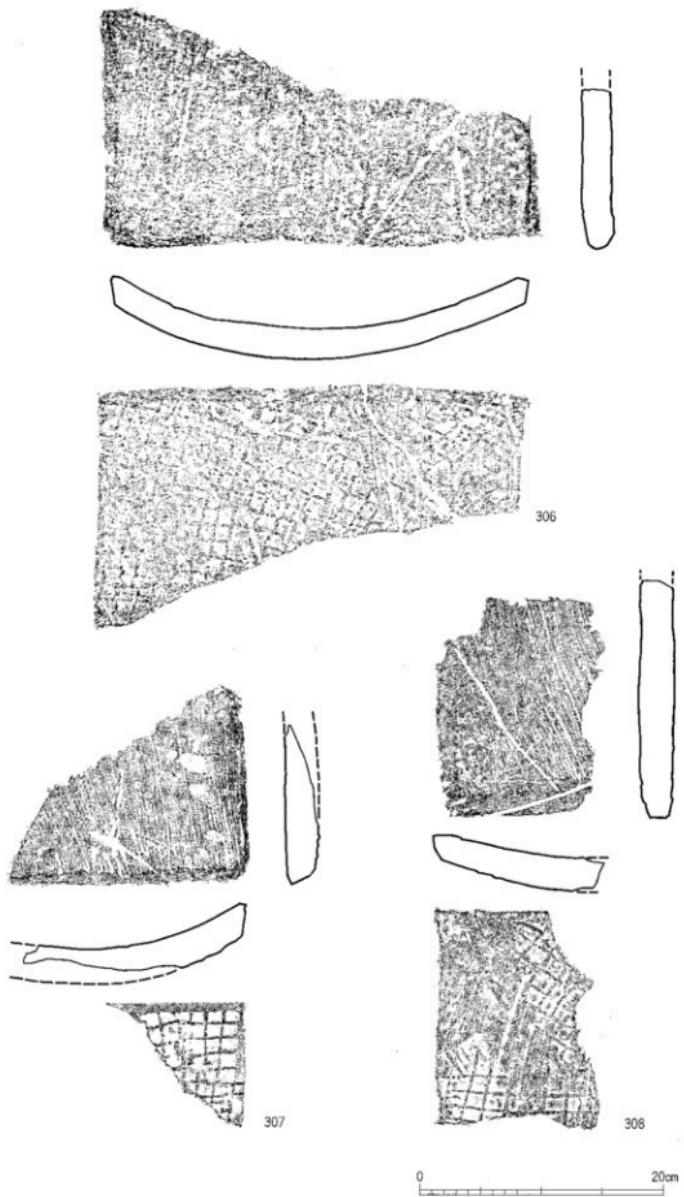
平瓦B II類 (316) 一辺2.4cm前後の斜格子の叩き目をもつものである。叩きは弧状に施され、そのち斜め方向のナデが施されている。凹面には糸切り痕、布目圧痕を残している。側面、端面はヘラケズリされている。凹凸両面側の側縁、凹凸両面側の端縁に面取りを施す。凹面には文字もしくは記号がヘラ書きされている。

平瓦B III類 (317・318) 一辺2.4cm前後のやや乱れた斜格子の叩き目をもつものである。叩きは弧状に施されている。凹面には布目圧痕を残している。側面、端面はヘラケズリされている。317は凹面側縁を面取りする。318は凹凸両面側縁、凹凸両面側縁を面取りする。317の横幅は23.9cmを測る。

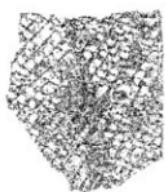
平瓦B IV類 (319・320) 一辺2.0cm前後の斜格子の叩き目をもつものである。叩きは弧状に施されているようである。凹面には布目圧痕を残している。側面、端面はヘラケズリされ、凹面側縁、凹面側縁を面取りする。

平瓦B V類 (321~324) 一辺1.2cm前後の斜格子の叩き目をもつものである。叩きは側縁に平行に施されている。凹面には布目圧痕を残しているが、322は中央部分に想いナデを施している。側面、端面はヘラケズリされている。側縁は321・322・324が凹面側を、323は凹凸両面側を面取りし、端縁は321・322が凹面側を面取りしている。321の横幅は26.7cm、322の横幅は25.9cmを計る。

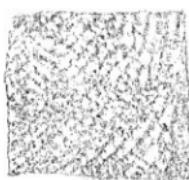
平瓦C I類 (325) 0.6cm間隔の横線に縦線を1本通した叩き目をもつものである。叩きは側縁に平行に施されている。凹面には糸切り痕、布目圧痕を残している。側面、端面はヘラケズリされ、凹面側縁、凹面側縁に面取りを施す。



第32図 3号窯跡 出土瓦 1



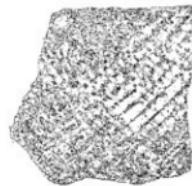
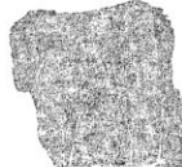
309



310



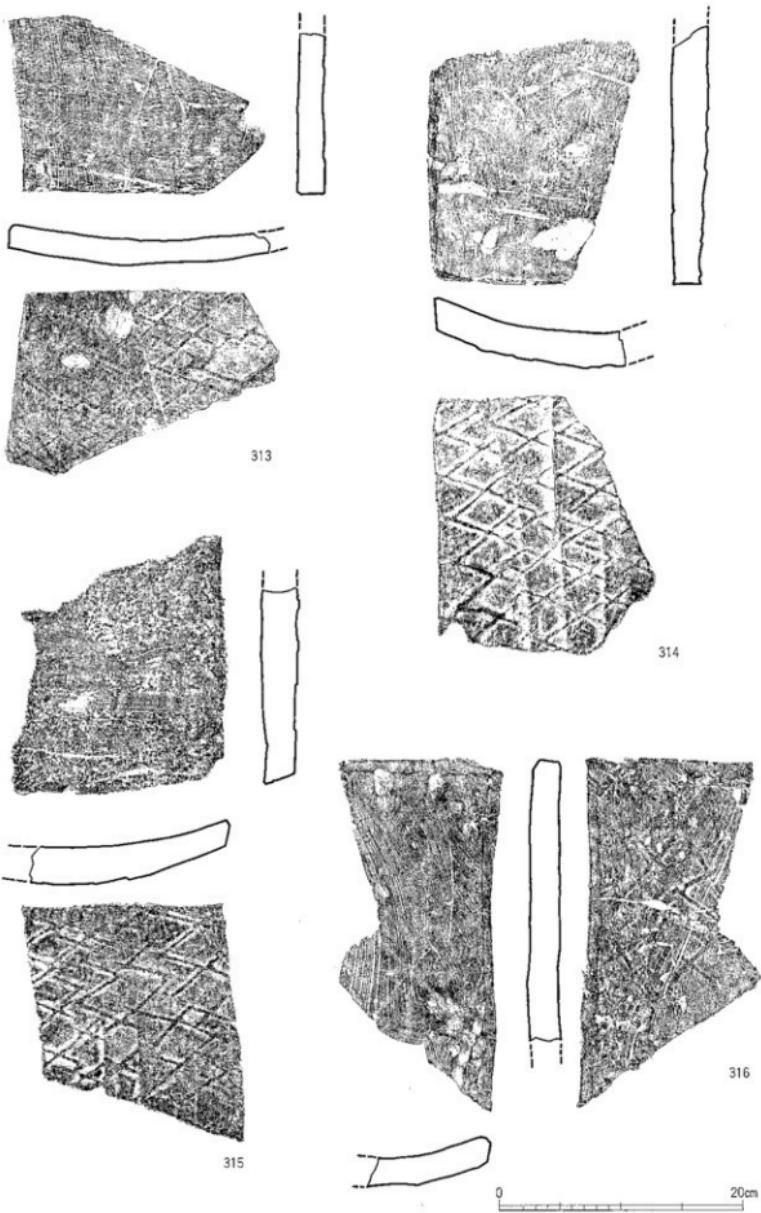
311



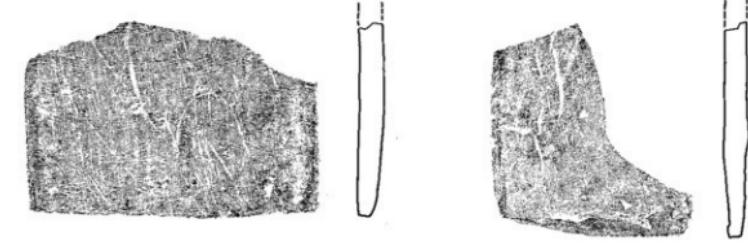
312



第33図 3号窯跡 出土瓦 2

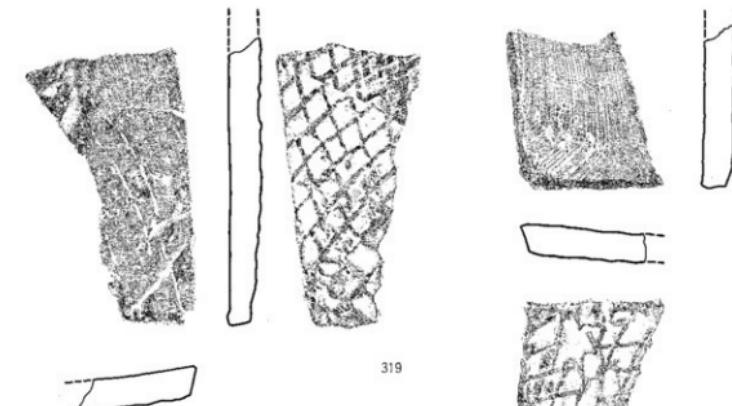


第34図 3号窯跡 出土瓦 3



317

318

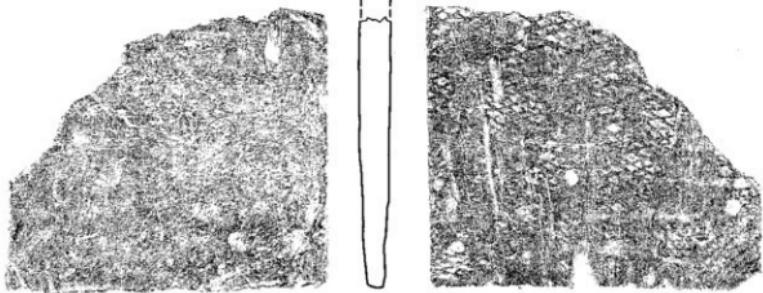


319

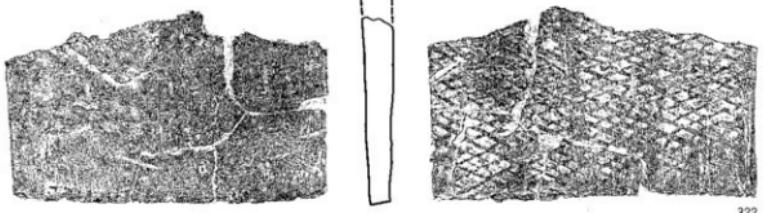
320



第35図 3号窯跡 出土瓦 4



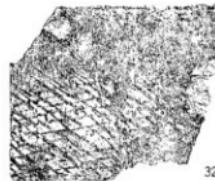
321



322

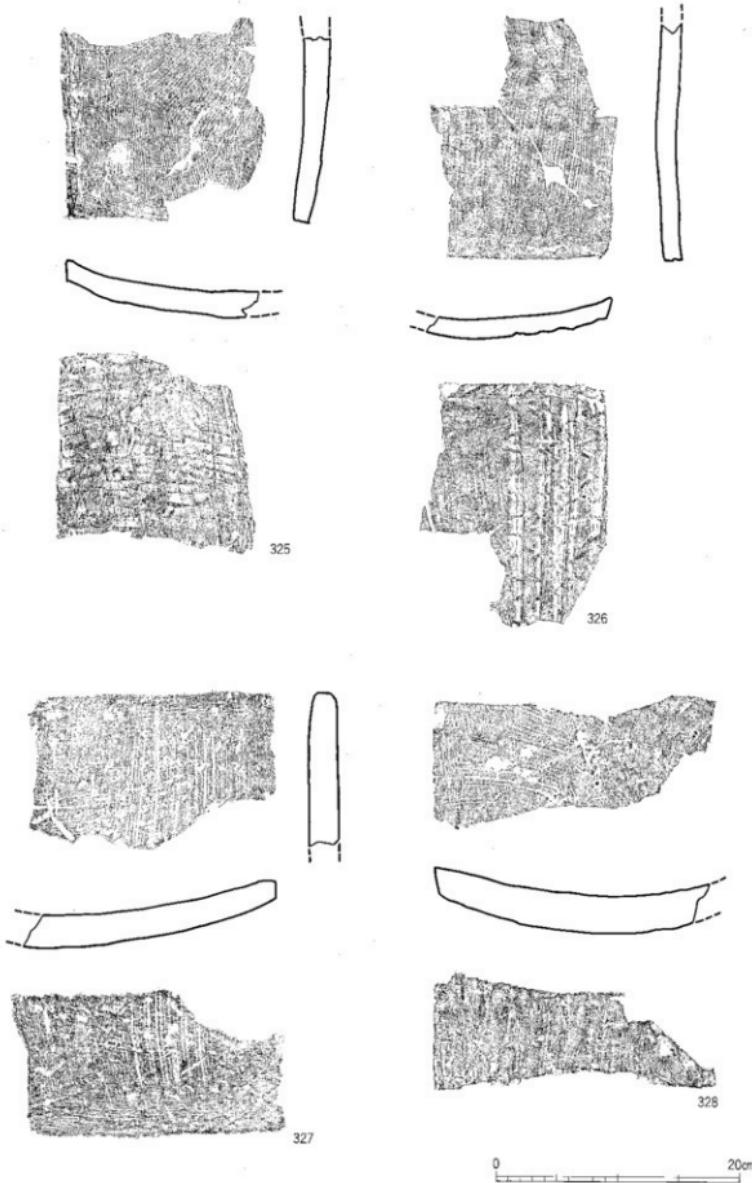


323



324

第36図 3号窯跡 出土瓦 5



第37図 3号窯跡 出土瓦 6

平瓦C II類 (326) 横幅の狭い互い違いに下がる斜線で構成される叩き目をもつもので、原体は粗く線刻され凹凸が大きい。叩きののち縦方向のナデが施されている。凹面は布目の上から縦方向のナデが施されている。側面、端面はヘラケズリされ、凹面側側縁に面取りを施している。

平瓦D I類 (327) 凸面にカキ目調整を施すものである。カキ目は凹凸両面に縦方向に施されている。側面、端面はヘラケズリされている。凹面側側縁、凹凸両面側端縁には面取りを施している。凹面には「女」のような字がヘラ書きされている。

平瓦D II類 (328) 凸面全体にナデ調整を施すもので、縦方向のナデが施されている。凹面は布目が残るが、中央部にも縦方向のナデが施されている。側面はヘラケズリされている。

・丸 瓦

丸瓦は平瓦に比べて量的に非常に少ないが、特徴的な製作技法をもつものがある。凹面の成形・調整痕により以下の3種に分類する。

A類：凹面に横方向のナデを施すもの。

B類：凹面に縦方向のナデを施すもの。

C類：凹面に布目を残すもの。

丸瓦A類 (329・330) 凹面に横方向のナデを施すものである。玉縁式の丸瓦で、土器の成形と同様に粘土紐を巻き上げて成形されている。凸面には回転ナデが施されている。側面、筒部端面、玉縁部端面にヘラケズリを施している。329は凹凸両面側側縁に、330は凹面側側縁に面取りを施している。凹面の筒部端面際は内側に肥厚した粘土を大きく削り取っている。329は玉縁部に「小上」とヘラ書きされている。このような成形技法をもつ瓦は東播系須恵器窯の神山窯跡群、三木窯跡群でもみられるものである。

丸瓦B類 (331) 凹面に縦方向のナデを施すものである。凸面には左下がりの平行叩きが施されている。側面にヘラケズリを施し、凹凸両面側側縁に面取りを施している。

丸瓦C類 (332) 凹面に布目を残すもので、一般的に良くみられるものである。側面、筒部端面、ヘラケズリを施し、凹凸両面側側縁に面取りを施している。凹面の筒部端面ぎわは丸瓦A類と同様に内側に肥厚した粘土を大きく削り取っている。

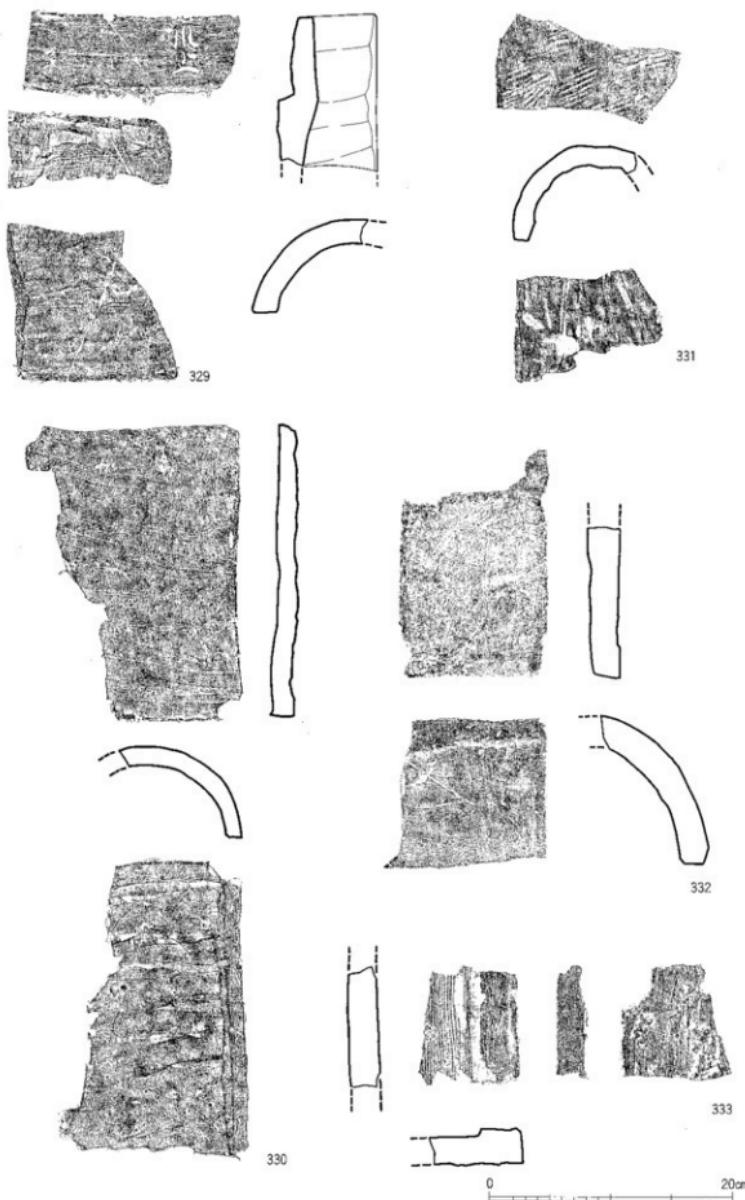
・道 具 瓦 (333)

小破片のため全形が不明で、用途もわからない。縁辺が1段高く、内側の1段低いところには縦方向にカキ目状痕が施されている。底面には縦方向のナデが施されている。厚さは1段低い部分で2.4cm、焼成は硬質、色調は灰黄色を呈する。

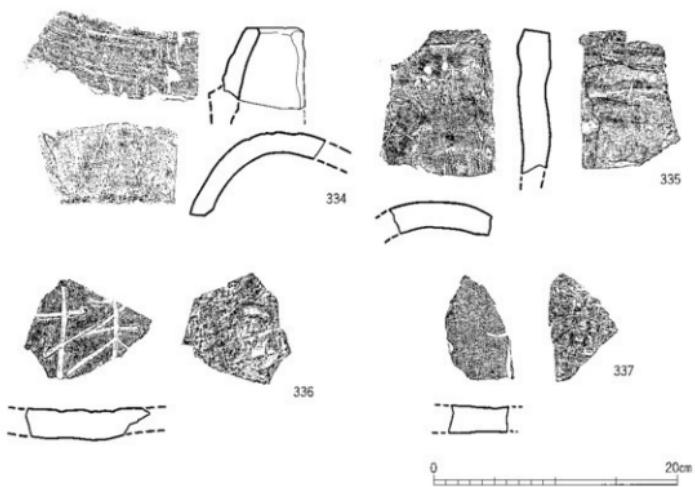
・文 字 瓦

文字瓦は県下ではこれまでに播磨国分寺、国分尼寺、延喜瓦窯など数箇所でしか出土していない非常に珍しい資料である。ただし、1、2文字のものばかりで、判読できないものもあり、その内容は理解しがたい。

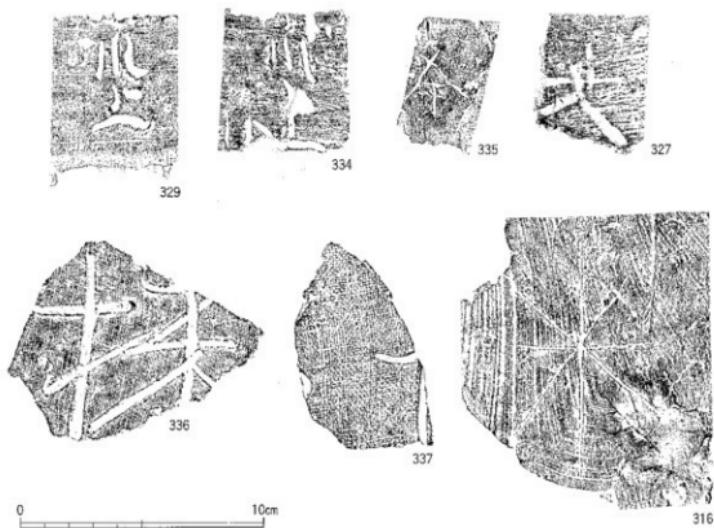
「小上」(329、334) 丸瓦A類の玉縁部凸面に玉縁部を上にして中央にヘラ書きされている。現在成は硬質、色調は灰黄色を呈する。



第38図 3号窯跡 出土瓦 7



第39図 文字瓦



第40図 文字瓦の文字部分

表1 3号窯跡出土平瓦観察表

番号	分類	横幅	厚さ	布目	焼成	色調	備考
306	A I	34.5	2.5		軟質	淡黄	
307	タ	—	2.6	8~9	硬質	灰白	
308	タ	—	2.8	磨耗	硬質	暗青灰	
309	A II	—	2.8	9~10	硬質	灰白	
310	タ	—	1.7	10~11	硬質	灰白	
311	タ	—	3.2	8~9	硬質	灰白	
312	タ	—	2.5	8~9	硬質	灰白	
313	B I	—	2.1		軟質	灰白	
314	タ	—	2.9		軟質	灰白	
315	タ	—	3.1	磨耗	軟質	浅黄绿	
316	B II	—	2.4	14~14	硬質	青灰	文字瓦「口」
317	B III	23.9	1.9	8~9	軟質	橙	
318	タ	—	1.9	8~9	軟質	暗青灰	
319	B IV	—	2.5		軟質	黄灰	
320	タ	—	2.3		軟質	灰白	
321	B V	26.7	1.8		軟質	灰白	
322	タ	—	2.2		軟質	灰白	
323	タ	—	2.3		軟質	灰白	
324	タ	—	1.9	8	硬質	灰灰	
325	C I	—	1.9		軟質	灰	
326	C II	—	1.6	9	硬質	青灰	文字瓦「女」
327	D I	—	2.4	カキ目状痕	軟質	灰白	
328	D II	—	3.0	8	硬質	明緑灰	
336	C I	—	2.4		硬質	灰	文字瓦「抹」
337	A II	—	2.1	9~10	硬質	綠灰	文字瓦「口」

(横幅、厚さの単位はcm、布目の単位は本/1cm)

表2 3号窯跡出土丸瓦観察表

番号	分類	玉縁長	筒部径	玉縁径	厚さ	焼成	色調	備考
329	A	7.2	15.8	12.6	2.0	硬質	灰白	文字瓦「小上」
330	A	—	15.4	—	1.6	硬質	明青灰	
331	B	—	14.2	—	1.6	硬質	灰白	
332	C	—	26.0	—	2.6	軟質	灰白	布目7~9本/1cm
334	A	—	—	9.2	1.7	硬質	灰白	文字瓦「小上」
335	A	—	—	—	2.3	硬質	灰白	文字瓦「口」

(玉縁長、筒部径、玉縁径、厚さの単位はcm)

龍野市に所在する「小神」は、『峰相記』によると「男上」と記載されている。「小上」は小神をさす可能性がある。

「口」(335) 丸瓦A類の筒部凸面に筒部を上にして右寄りにヘラ書きされている。

「女」(327) 平瓦D I類の凹面の左寄りにヘラ書きされている。みた感じ「女」のようであるが、2画面と3画面の順番が逆である。

「抹」(336) 平瓦C I類の凹面にヘラ書きされている。

「口」(337) 平瓦A II類の凹面にヘラ書きされている。片の一部であろうか。

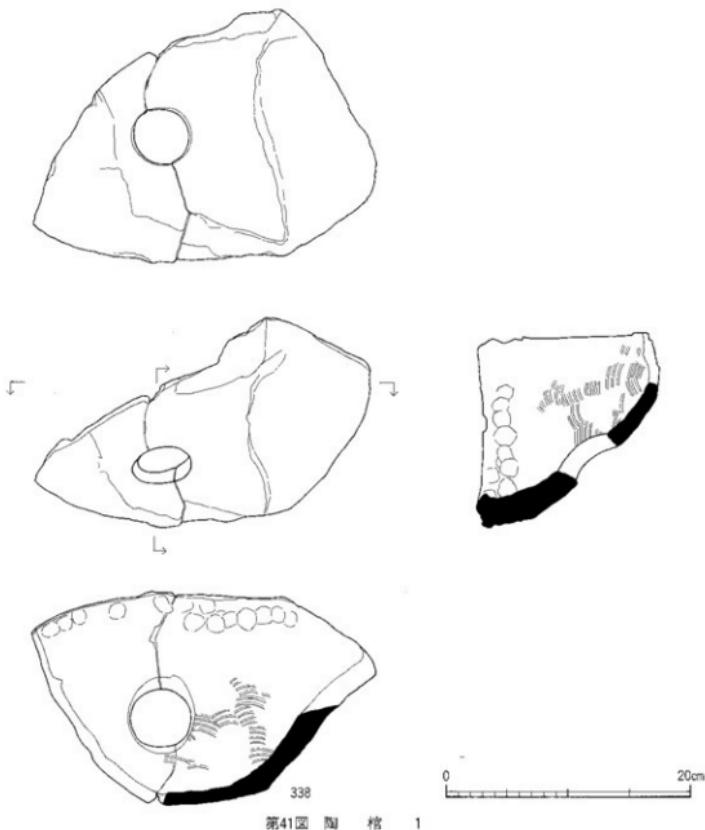
「口」(316) 平瓦B II類の凹面の右寄りにヘラ書きされている。断の作のようである。

当窯跡群が所在する龍野市には寺院跡や官衙跡などが幾つか所在するが、半瓦・丸瓦について報告されたものは非常に少ない。わずかに報告された小丸瓦跡や小神廃寺などの出土例の中にも同様のものは見いだすことはできない。また、院政期の京都における寺院造営との関連も考慮に入れなければならないが、京都においても平瓦・丸瓦についての報告は皆無に近いため検討することができない。現在のところこれらの瓦がどこに運ばれたのかは不明である。今後にその供給地の解明が待たれところである。

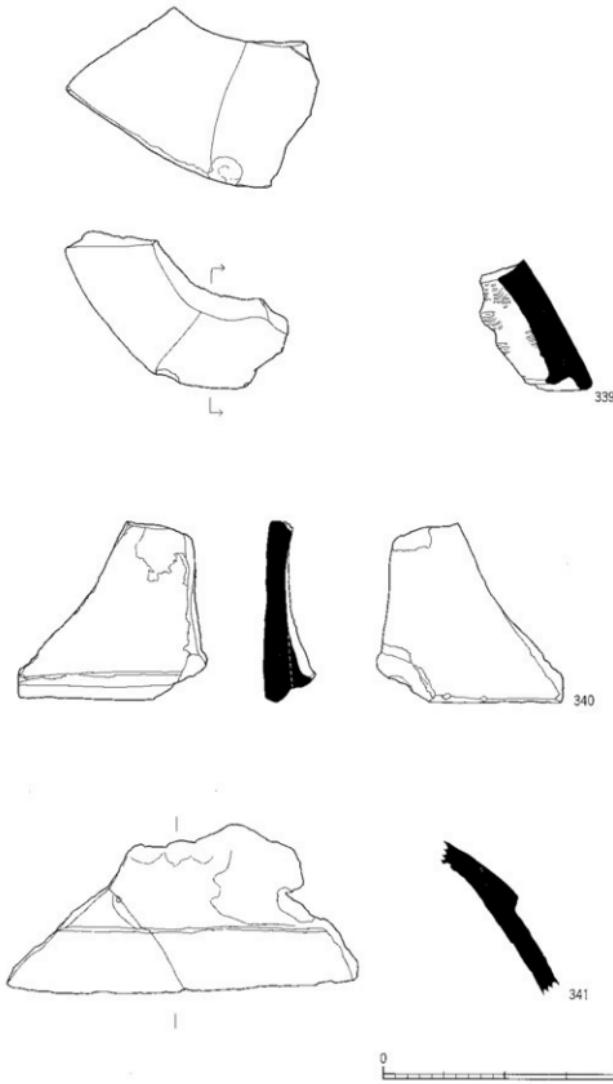
第4節 陶 棺

4号窯跡の周辺から採集された、須恵質の陶棺片である。4号窯跡とは完全に離れて出土しており、両者の直接的な関連性は認めがたい。

338は径5.0cmの円孔をもつ。外面はナデ、内面は下端には顕著な指押さえが行われ、その上位には円弧状の叩きがわずかに認められる。焼成は不良で、灰白色を呈する。339は外面に鈍い段が立ち上がり、コーナー部分と考えられる。端部が段が形成されており、内面に向けて突帯が巡る。内面は叩きを施し、焼成は悪く、灰白色を呈する。340は下端が直線となり、内面に段を貼りつける。外面には不整なナデがわずかに残る。焼成は悪く、灰白色を呈する。341は外面に直線的な段を有する。下端は粘土の接合箇所であり、直線となる。焼成は不良、灰白色を呈する。



第41図 陶 棺 1

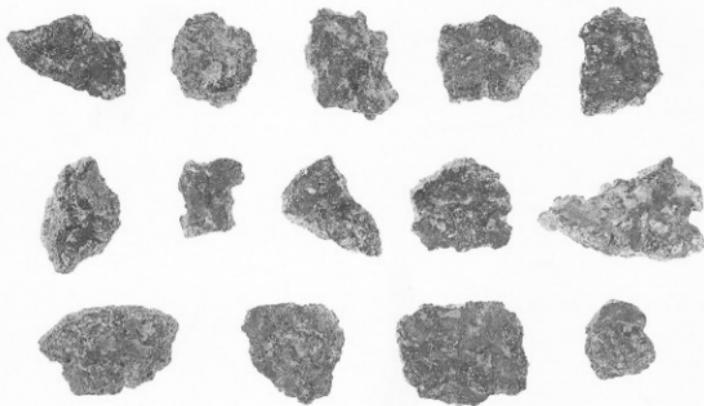


第42圖 閨 棺 2

第5節 炉壁片・鉄滓

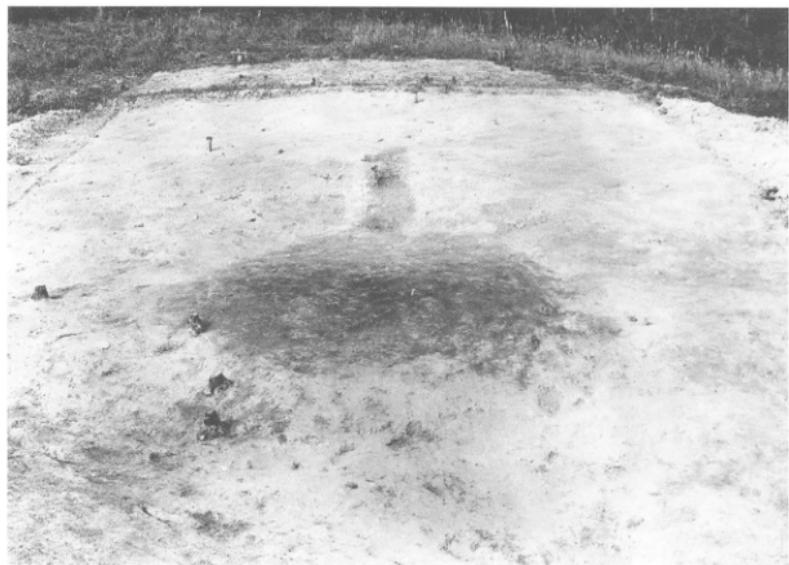
5号遺構からは製鉄炉の炉壁片が出土した。内面は船状に融解した状態で、表面はくすんだ黒色を呈する。内面に木炭痕を残すものもある。壁体はスサ入り粘土で、赤橙色に酸化している。スサ入り粘土には礫をあまり含んでいない。箱形炉の通風孔付近の炉壁であろうか。

他に鉄滓も出土している。



第43図 炉 壁 片

写 真 図 版



1号窯跡（表土除去後）

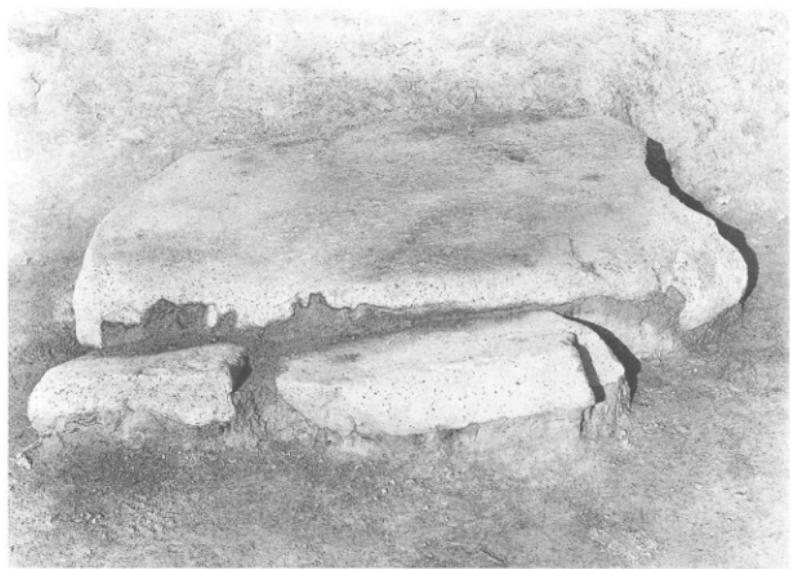


1号窯跡全景

1号窯跡



1-A 窯跡



1号窯跡



2号窯跡全景



2号窯跡

1号・2号窯跡全景



3号窯跡全景（調査前）

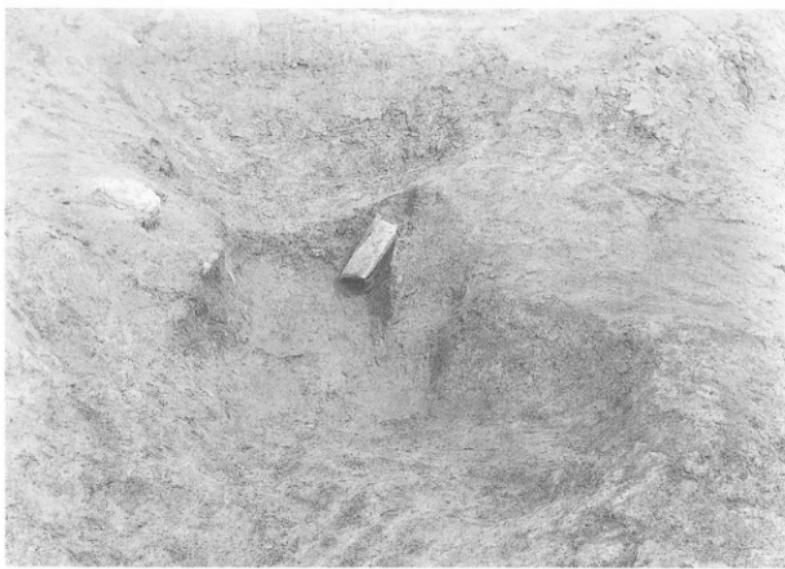


3号窯跡全景（調査後）

3号窯跡



3号窯跡全景



3号窯跡

3-A窯跡全景



4号窯跡全景



4号窯跡全景(西から)

4号窯跡

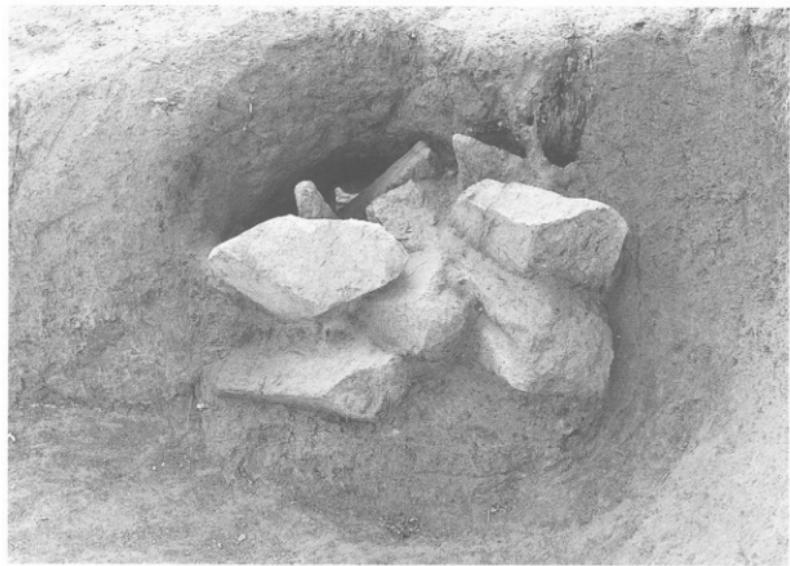


横 口 (煙道部側)

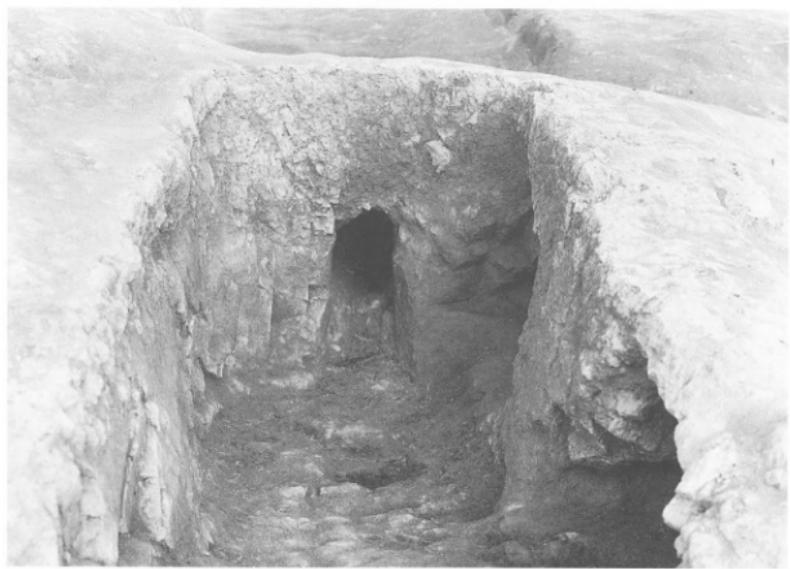


焚き口

4号窯跡



煙道部（窯体外から）



煙道部（窯体内から）

4号窯跡



5号遺構全景（北から）



5号遺構全景（西から）

5号遺構

図版10



1



2



11



12



13



14



15



16



17



24



25



28



34



35



36



48



49

1号窯跡出土土器



69



72



73



75



76



77



90



91



92



95



96



101



102



104



105



110



112



115



116



117



118



120



121



122



123



124



125



127



128



129



130



131



132



133



139



140



141



142



143



144



145



147



148



149



150



151



152



153



154



156



155



157



158



159



161



162



163



164



165



166



167



168



169



170



171



172



173



174



175



176



177



178



182



184



186



189



190



194



197



202



203



204



206



208



209



211



214



215



216



227



233



235



288



188



249



255



263



265



270



271



280



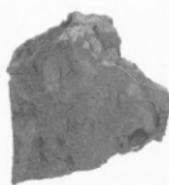
281



301



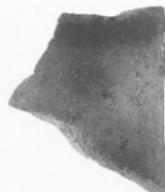
302



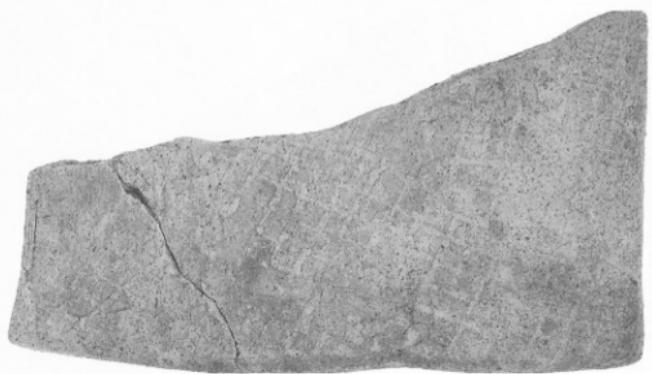
303



304



305



305

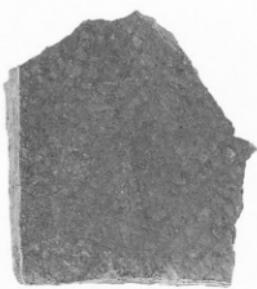
3号窯跡 出土瓦 1



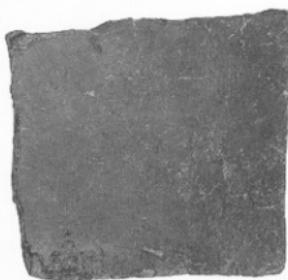
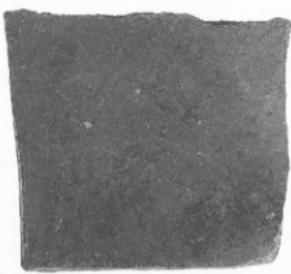
307



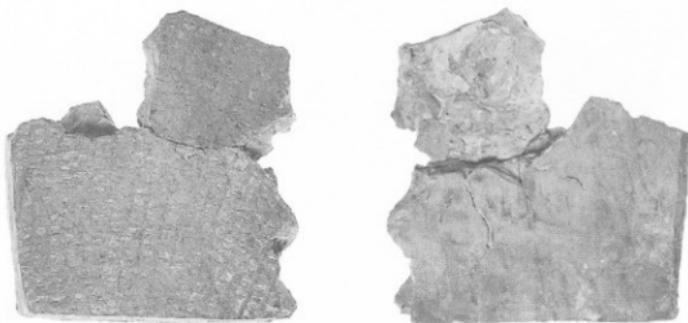
308



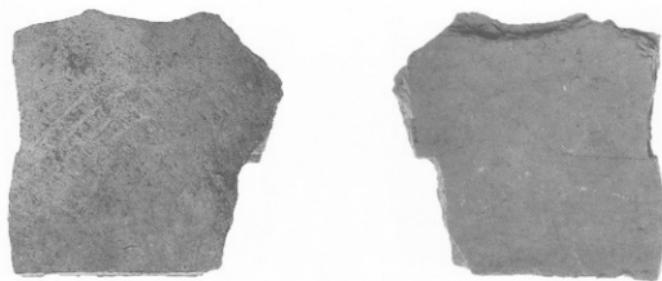
309



310



311



312



313



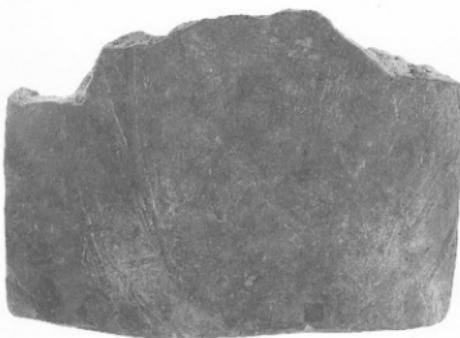
314



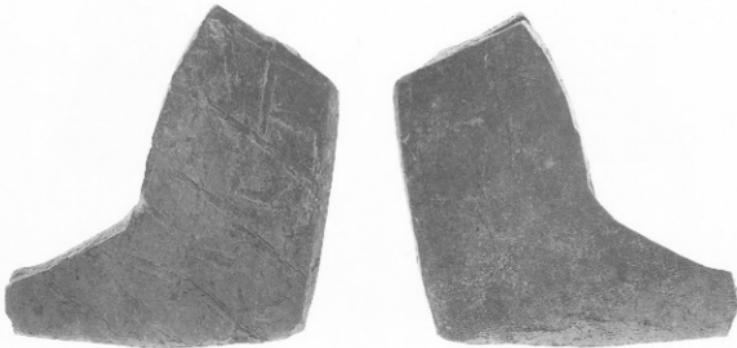
315



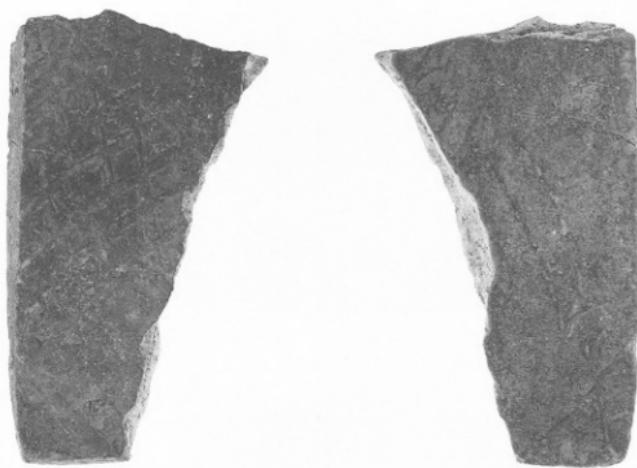
316



317



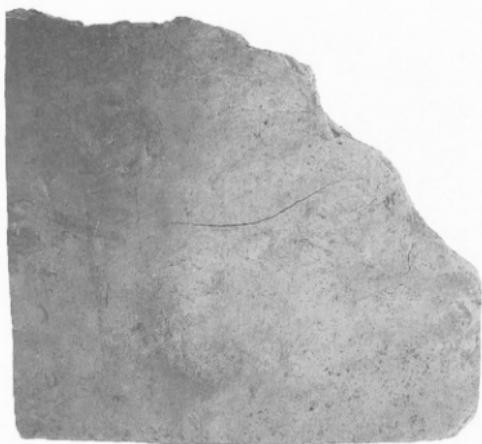
318



319



320

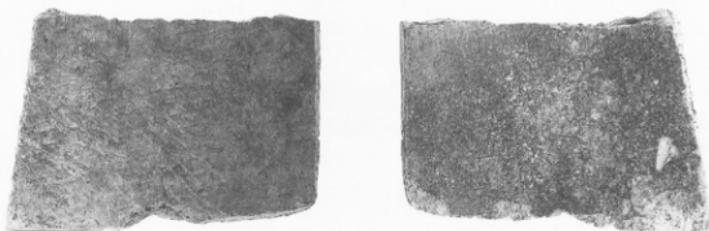


321

3号窯跡 出土瓦 9

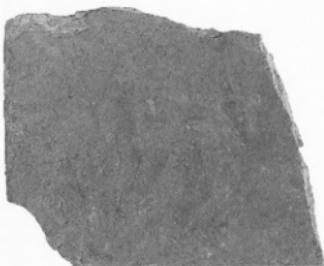


322

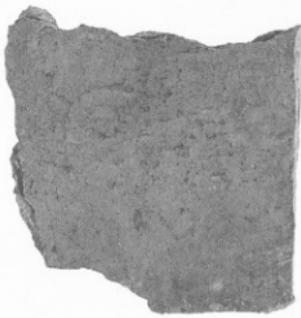


323

3号窯跡 出土瓦 10



324



325



326



327



328



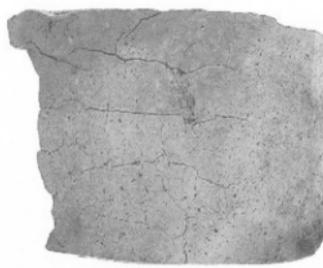
329



330



331



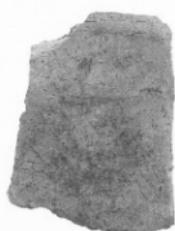
332



333



334



335



336



337



329



334



335



327



337



336



316

兵庫県文化財調査報告 第140冊

大陣原古窯跡群

—山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査報告書 X IV —

平成7年3月31日発行

編集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号
TEL 078-531-7011

発行 兵庫県教育委員会
〒650-0011 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印刷 水山産業株式会社
〒653-0012 神戸市長田区二番町3丁目4番1号



この冊子は、吉紙100%の
再生紙を使用しています。